

ヒゲカイホー

青山学院大学比較芸術学科 VOL.14

THANKS
TO
コロナ!?



記事

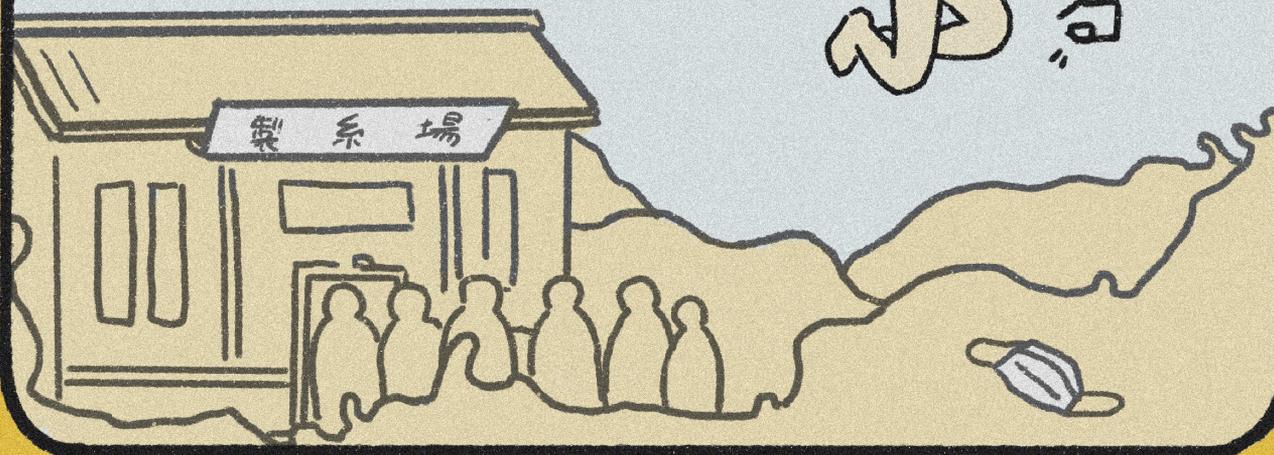
青春cm²

インタビュー企画

先生方も参戦!! ヒゲ生によるヒゲ生の
コラム・アンケート etc...

— 地獄で

糸を創る



2021.SPR



- ✿ コロナ自粛にうってつけの美 * 3
1年 西山 侑華
- ✿ 「隔たり」と「言葉」 * 9
3年 堀内 秀平
- ✿ 美しさは君の中に眠っている。 * 5
2年 久保 翔誠
- ✿ フレデリック・ショパンが
《12の練習曲》Op.10で追及した音楽とは * 11
4年 岸本 彩菜
- ✿ 突発！オンライン寄席 * 7
3年 生田目 幸穂
- ✿ スマホの中の多様性 * 13
—タイのドラマに描かれるセクシュアリティとジェンダー—
4年 山下 実紗
- アンケートコーナー
Thanks to コロナ! ? * 15
3年 犬飼ゆうり
コロナとひげ活 コロナと大学生 アンケート
- ✿ 日本におけるコロナ後の
オープンマイクのあり方について * 17
2年 丸岡 雅弘
- ✿ コロナ禍での芸術鑑賞のすすめ * 21
3年 町田 大悟
- ✿ 大禍のなかで * 19
—映像系部活動の小さな話—
3年 榎 将吾
- ✿ 2020年の演劇 * 23
～『ピリー・エリオット』上演の“奇跡”と“軌跡”～
4年 井上 花菜
- インタビュー企画
オンライン講評のすすめ * 25
多摩美術大学1年 黄地 香の子
- ギャラリーコーナー
ひげぎやらりいへようこそ * 30
- インタビュー企画
演劇の新形態を語る * 27
春陽 漁介
取材・文 3年 戸村 桃音
- ファッションスナップ企画
Hige Collention With mask * 37
3年 鈴木志歩 穴戸亜紀
- 先生コラム
先生から見たオンライン授業 * 39

今号のテーマ・主旨

2020年は新型コロナウイルスにより、たった半年足らずで生活が激変する異例の事態に見舞われました。コロナ「禍」とニュースやネットで耳にするように、この激変は当然我々の生活に大きな影響を与え、今でも毎日不安との戦いが続いています。ですが現在コロナ禍中で「新しい形態」「新しいアプローチ」を見つけようとし、我々に元気と勇気を与えてくれている活動も多く見られます。この動きは芸術分野でも起こっており、今号では「Thanks to コロナ!？」と題し未来に動き出している様子をピックアップしました。新型コロナウイルスに負けず、前向きに動き出している芸術を取り上げることで読み終えた時には コロナのおかげで見つけられたこともあったと読者のみなさまに明るい気持ちになっていただけたら嬉しいです。

表紙 井口周子

私達には手があります。モノを作る手、方策としての手——
コロナによってガラリーと何もかもを変えられてしまった2020年を「地獄」と喩えるならば、その「地獄」での「蜘蛛の糸」はコロナの収束でしょうか。垂らされる一筋の糸だけを願うことが悪いとは思いません。けれども案外、地獄には他にも糸が潜んでいるかもしれないし、糸をよるのに必要な材料が落ちているかもしれない。為す術なく元いた場所を見上げるより、今いる世界ではどんな発見と創造が可能かを一緒に考えてみませんか。皆で手を動かせば、「製糸場」だって建てられるかもしれませんよ。

裏表紙 宍戸亜紀

表紙に描かれた製糸場で作られるマスクの広告をイメージしました。デザインは大正、昭和あたりのレトロ感を意識しています。マスクを手放すことが出来ないこの時代。顔が隠れることにマイナスのイメージを抱く人も多いでしょう。このマスクは“隠す”というよりも、マスクによって“魅せる”ことを目的としています。自分の肌に似合う色、模様、形。さらに科学が発展すれば、透明の繊維で表情が見えるマスクなんかも。歴史を辿れば、日本のモノづくりに対する底力は侮れません。自分を魅せるマスクは人それぞれですから、あえてこの絵のマスクはシンプルにしています。マスクがある未来を少しでも前向きに、期待を膨らませながら、皆さんの好きなマスクを投影してくだされば幸いです。

コロナ自粛にうってつけの美

1年 西山 侑華

誰も予想だにしていなかった新型コロナウイルス感染症の流行により世界中が混乱に陥っている。それは日本も例外ではなく、またどの業界も、そしどの個人も例外ではない。たとえば、東京五輪の延期に始まり、ライブが中止になったり、美術館に足を運ぶために入場予約の有無を確認したり、もつと言えば実は学校にまだ一歩も足を踏み入れていないだとか、多少の差はあれど、今までは違う生活の在り方に困惑しただろう。しかし、人間というのはたくましいもので人々は「新しい生活」とかなんとかいうものに順応し始めた。たしかに未だ生の舞台や演奏に触れられる機会はかなり絞られており、一時は映画館すら放映を中止していたわけだが、きつと自宅にいる中でも楽しめる何か、というのをそれぞれ見つけているのではないだろうか。

まずその筆頭に挙げられるのは、サブスクリプションサービスの利用だろう。わたしたちは今の時代、家から一歩も出ることなく古い名作から最新作まで映画や音楽を楽しむことができる。このサービスはコロナ禍以前からすでに利用する人がそれなりに多かったが、外出自粛期間を経て、さらに

その利用者数が急増し、また、コンテンツや楽しみ方は多様化してきた。単籠りが先か単作りが先か(ここでは単籠りが先、ということになる)。「サブスク」の発展はとどまることなく、いくつかの動画サブスクリプションサービスでは離れていても同じ動画を同時に視聴できるような機能も現れてきている。一緒に映画館に行くような気分を味わえる。コロナ禍においてはこうした直接対面しないながらも誰かと関わりあっているようなサービスが注目されている。

さらに、ここからはSNSでの流行についての話となるが、[#おうちカフェ](#)もまた、もとからあったタグがコロナ禍の外出自粛区間において勢いづいた例の一つだ。イチゴ飴、ダルゴナコーヒーといった作る手間はかからないが写真映りのよいものが特に流行ったように思う。なかでもわたしが特に気に入ったのは[#おうちパフェ](#)だ。写真映りの良さとしてはピカイチなネタだが、なかなか難易度が高いように思われる[#おうちパフェ](#)。しかし、パフェ評論家である斧屋さんのコンビニに売っている材料で、パフェを作るといふ記事を読む限り、人々は、

家でもまるでお店でできるとようなパフェを作ることができると。この記事で作られたパフェは「これはなに?……」と捕食者の意識を虜にする謎の物体Xの存在(三角の小枝の椅子に鎮座する雪見だいふく)から、食べるとなくなる素材と素材の間の刹那的空間表現、また側面からの視線を意識して積み上げられているところに至るまで、ぬかりなくその佇まいは完全なパフェだ。この記事では斧屋さんなりの考察として「パフェが「たまに食べるもの」から「作るもの」と変わってきている」といふパフェを取り巻く状況の変化も併せて語られている。

また同じく SNS で話題になった[#OasisArtChallenge](#)というタグと共に投稿された作品群もたいへん興味深い。SNSで一度このタグを検索してみると、画面左手のソファに座りギターを持つ人、中央には人が横たわり、よく見るとその傍らにはワイングラスが置かれている……という写真が何枚も見つかる。どうして同じ写真が何枚も見つかるのか。それはこれらがすべて熱心に再現された Oasis のジャケット写真のパロディだ

「斧屋、文春オンライン、『年間パフェ415個を食す私が、セブンイレブンの材料でパフェを作ってみた(全工程写真付き)』年間パフェ415個を食す私が、セブンイレブンの材料でパフェを作ってみた(全工程写真付き)」

文春オンライン (bunshun.jp) (閲覧日:2020年11月26日)
「斧屋、文春オンライン、『年間パフェ415個を食す私が、セブンイレブンの材料でパフェを作ってみた(全工

程写真付き)』4頁、(4ページ目年間パフェ415個を食す私が、セブンイレブンの材料でパフェを作ってみた(全工程写真付き)) 文春オンライン (bunshun.jp) (閲覧日:2020年11月26日)

からだ。実際のジャケットと見比べてそっくりな部分を見るのももちろん楽しいが、壁や床といった家の背景、一緒に写った家族兄弟、あるいは父母っぽかったり、はたまた子供だったりする、似た写真でもそれぞれどこを再現するかどう再現するか選択と判断の違い。同じようにOasisを好きな人であっても絶対に一様ではない、それぞれの個性が見つかることもこのタグの醍醐味だと思う。また、この写真を撮るためにわざわざ部屋を片付けたり散らかしたり、画角を考えたりするのだろう、と想像すればそれは大変な労力に感じられる。というかもっとこの写真たちがウケるためにはOasis自体の知名度が重要である。しかしそれらの困難に負けることなく、コロナ禍のなか半ば強制的に引き離されてしまった人々の間をOasisを愛する気持ちはとりもつてくれたわけだ。

ここまで述べてきた流行の裏には、コロナ禍の閉鎖された自粛社会と対照的に、人々が開放的であることのできる場であるSNSの強みがあると思う。これらの活動のひとつひとは大きな発表の場や観客を持つようなものではないため、芸術というよりは芸術的な活動、と表現した方が正しいかもしれない。しかしこのコロナ禍で大事なのは如何にして他人とのつながりを保つかである。だからまず、人との交流が限られたなかで直接的な接触なしに人との関わりを継続的に持つことがで

きる場としてSNSが重宝されたのだろう。しかし同時にSNSとは美しい可愛い面白いもの、つまりは視覚的にわかりやすくウケのいいコンテンツをあげたい場であり、それらをあげたものが強者となる場でもある。そのために人々は所謂「映える」写真を撮りたがる。そしてそのふたつの特徴がコロナ禍という特殊な状況のもと組み合わさったことでSNSはそのささやかな芸術の大舞台になりえたのだ。

ちなみにその舞台を語るときに「不要不急」なる文言というのは登場しない。家で映えるコーヒーを入れる必要も好きなアーティストの真似をする必要も、そもそも家にいるだけなのだから人と映画を楽しむ必要も本来は特にないだろう。しかし暮らすうえで心が満ちる時間が少しでも多くあればいいというのが平和的な考えで、その手助けに芸術がなっているというのはとても素晴らしいことだと思う。コロナ禍という苦境を土壌として、SNSで咲いた芸術の花というのは、人々の心を癒したに違いない。また最近チラホラと聞くこともあるポストコロナの世界では、こうした受容の仕方の変化を種に斬新な芸術が芽生えるだろうかと思うと今でも心が高鳴る。

【参考資料】

斧屋、文春オンライン、『年間パフェ 415 個を食す私が、セブンイレブンの材料でパフェを作ってみた(全工程写真付き)』年間パフェ 415 個を食す私が、セブンイレブンの材料でパフェを作ってみた(全工程写真付き) | 文春オンライン (bunshun.jp) (閲覧日:2020年11月26日)

朝日学情ナビ、『コロナが追い風「サブスク」ビジネスってなんだ』コロナが追い風「サブスク」ビジネスってなんだ【時事まとめ】 | 就活ニュースペーパーby朝日新聞 - 就職サイト あさがくナビ (gakujo.ne.jp) (閲覧日:2020年11月26日)

ファミ通.com、『Amazon プライムビデオに“Prime Video ウォッチパーティ”が登場。お気に入りの番組をシェアして最大100人で作品鑑賞やチャットが楽しめる!』Amazon プライムビデオに“Prime Video ウォッチパーティ”が登場。お気に入りの番組をシェアして最大100人で作品鑑賞やチャットが楽しめる! - ファミ通.com (famitsu.com)(閲覧日:2020年11月26日)

美しさは君のなかに眠っている。

2年 久保翔誠

人類が未曾有のウイルス災害に見舞われてはや1年が経とうとしている現在、皆様いかがお過ごしでしょうか。一度収まつてきたと思つたらまた振り返り、予断を許さぬ状況下で、四六時中マスク生活を強いられるわけですが、そろそろウンザリじゃないですか？だってマスクつて盛れないんだもん。マスクのせいで口周りやフェイスラインに頑固なニキビができてちやつて、なかなか治らないし、人と話していても表情が伝わりづらい。買い物をしていても、店員さんの言葉が聞き取れなかったり、逆に何度も聞き返されたり。そして何より、朝から入念に作りこんだメイクがすくヨれる！もう……マスクの裏側についたファンデとリップを見たときの絶望たるや……。つや系リップを塗ろうものなら、「魚拓^{ぎょたく}？？」ってレベルのセルフキスマーク。化粧する気が失せるっちゅーねん。

さては、冗談交じりに言っていますが、化粧品業界は大変苦しい状況です。日本を代表する化粧品メーカー・資生堂は2020年第2四半期の売上が前年同期と比べて26%減と発表したほか、ソフィーナ・Kaneboを有する花王や、雪肌精などで有名なコーセーも売上が20%以上減少しており、特にメーカー部門は深刻な打撃を受けています。まったく、気の滅入るようなニュースばかりが目に入る昨今ですが、僕にとつてこの〈おうち時間〉は、人生を変えてしまうほど、大きな一歩を踏み出す契機となりました。

読者の皆さんの中には、この記事を女性が書いていると思つていた方も、多いのではないのでしょうか。実のところ、僕は男性で、これは、「自粛期間に使うあてが無くなったバイト代を全部コスメに費やした男子大学生の話」です。この期間に僕は、

美容系 YouTuber の動画を見漁り、スキンケア、メイク用品、ヘアケア、さらにはネイルに至るまで、種々のコスメを収集しました。ちなみに初めて購入したコスメはメイベリンのポイントメイクアップリムーバーで(なんぞ？)、デパコスデビューはコスメのリンクドファンデーション(オススメです)、一番高額な買い物はZELER のフェイスパウダーです。(5千円。高！)こうして見事コスメに沼つたワケですが、僕は今、心から楽しいと言えません。コロナは僕からたくさんの当たり前を奪つたけれど、もつと自分を好きになれるきっかけを与えてくれた。コロナのおかげで、僕は僕の知らない自分に出会うことができました。

僕は元々、ニキビが得意やすい体質で、それがコンプレックスです。皮膚科には中学1年生の頃から通っているし、保湿や食べ物にもそれなりに気を遣ってきたのですが、どうしても治りません。もちろん、ニキビが多いことで特段後ろ指をさされることはないのですが、自分ではどうしても気になって、前髪を伸ばして額を隠したり、手で潰したりすることもありました。そんな僕がメイクに出会ったのは、高校1年生のときです。当時僕は演劇部に所属していて、舞台化粧を先輩に教えてもらったときに、人生で初めてメイクをしました。そのときの感動を、今でも覚えています。自分はこんな顔になることができる、これなら恥ずかしくない。自然と自信がみなぎり、演技も熱を帯びました。

それから僕の目は肥えました。同級生の女の子のメイクを観察したり、テレビ番組や映画に出てくる芸能人のメイクを分析して、時には品評したりしました。今になって思えば、あれは完全に「興味」であつて、「憧れ」です。けれども、当時の僕

にはメイクが「女性のもの」としか思えなくて、舞台などの特別な場合を除いて男性がメイクをするのは「おかしい」ことであり、興味を持つことすら恥ずかしいことだと考えていたのです。また、僕の稚拙なバイアスを決定づけるように、こんな出来事がありました。

ある時、学校帰りにたまたま、百貨店の化粧品売り場を通りがかりました。平日の夕方、人のまばらなフロアには化粧品独特の甘い香りが満ちていて、リップやアイシャドウの極彩色が照明の光を反射してキラキラと輝いていました。僕は、あの空間が好きです。各ブランドがそれぞれの世界観を構築し、せめぎあい、溶け合った空間はどこか空想のようで、非日常の高揚感に満ちています。昂る気持ちを悟られまいとしながらも、憧憬を隠し切れない僕の視線はある1点に釘付けになりました。当時は知識もなかったのですが、どこのブランドの、どんな商品だったのか思い出すことができません。けれど、リップだったと思えます。もしかしたら、ホリデーシーズンだったのかもかもしれません。その鮮やかな赤と、美しい外装に心奪われ、思わず近くに寄つて、しげしげと眺めてしまいました。制服姿の男子高校生がデパコスのリップを熱心に見ているわけですからさぞかし珍妙な様子だったことでしょう。すかさず出てきたCDさんに声を掛けられました。「プレゼントですか？」僕は、にっこり笑つた美しい女性に、返す言葉が見つかりませんでした。

それ以来僕にとってメイクは、バンドラボックスになりました。湧き上がる好奇心を自ら抑え込んだのです。それでも、僕は高校を卒業してからフリーの役者として活動していたので、何度かメイクをする機会がありました。舞台上では最高に美し

い状態で存在したい。けれど日常でそれを追及してはいけない。今になって思えば妙ちきりんなダブル・スタンダードです。その不格好な均衡を崩したのが、コロナ禍による自粛期間でした。

コロナの功罪は様々あれど、1つの明らかなメリットとしては、時間に余裕が生まれたことです。通学することもなくなり、おうち時間が増えた僕は、必然的に、自分と向き合う時間的な余裕ができました。今まで忙しさにかまけて見て見ぬふりをしてきたコンプレックスも、はつきりと自覚しました。そしてステイホーム中に散々お世話になったYouTubeには、同じような悩みを抱えながら、それでも前向きに、楽しく情報発信している人がたくさんいました。さらに、外出することが極端に減ったこの期間は、蓄えた知識を実践し、反省して改善する期間としては、まさにうってつけでした。満を持して開けられたバンドラボックスは、見る見るうちに僕の口座から金を吸い上げていったのです。

一口にメイクといつてもたくさんさんのやり方がありますが、僕は女の子になりたくてメイクをするわけではありません。また、メンズでも、ストロボアイドルのようなメイクを目指しているわけではなく、男性芸能人がテレビや映画の中でしているようなナチュラルメイクをしたいのです。詳細な解説はここでは避けませんが、自分の肌の色や、目や眉の形を活かしつつ、従来持つ顔の凹凸を強調することでより自分の顔をより整った印象に見せるメイクを探求しています。そしてそれは、まだまだ未開拓の分野です。男性の美容系 YouTuber も多くいらつしやいます。女性に比べてまだまだ数は少ない。少ない教材の中から自分のロールモデルを探すのは、なかなか難しいものです。しかし、考えてみるとおかしな話ではないでしょうか。メディアに出演するタレントや、映画・舞台の俳優、あるいは伝統芸能である歌舞伎でも、男性がメイクするのは当たり前だし、僕たちはそれを何の疑いもなく受容しているのに、それを日常生活の中でするととなると、「そういう人」の烙印を押されてしまう。まったく、僕が歪んだダブル・スタンダードに苦しむのも無理はあり

ません。これは僕個人の問題ではなく、日本全体に蔓延する縛りだったのです。

〈美〉には形がありません。古来より追い求められてきたそのアイデアは、流れる年月の中で移ろってきました。そして僕たちはまさに今、〈美〉への価値観がドラスティックに変化してゆく、大きな時代のうねりのなかを生きています。近年、女性の権利を保護し、男女平等の社会を目指す運動が活発に行われています。それに伴い、夫婦別姓をめぐる議論や、「CHOICES」をはじめとするセクシュアルマイノリティに対する理解を求める声も高まっております。多種多様な生き方を受け容れ、尊重する社会に向かって前進しつつあります。

翻つて、メイクにおいても、メディアによつて作り出された画一的な〈美〉を探求する時代は終わりを告げました。メイクをしたい男性もいれば、したくない女性もいる。否、そんな二元論ではなくて、性別、年齢、肌の色やその状態に関わらず、誰もが自分を愛し、他人に強制されることなく、多様な〈美〉を目指すことができる。そんな明日がもうすぐまで来ています。

コロナによる自粛期間は、確かに化粧品品の売り上げを減少させたかもしれませんが、読者の皆さんも、マスク生活でファンデーションやリップを塗らなくなつた人は多いかと思ひます。しかしそれは、僕にとつて自分の好奇心を解放し、なりたいた自分を実現するためのチャンスとなつたように、普段からメイクをする皆さんにとつても、自分にとつて何が本当に必要なか、見直す機会になつたのではないのでしょうか。メイクは生活必需品ではありません。あくまで人生を彩り、自分をもっと好きになるためのものです。それがあたかも課せられた義務のように感じられて、窮屈な気持ちで鏡と向き合つていたことはありませんか？ コロナは起爆剤になりました。以前から興隆していた運動の波と合流し、加速したこの波動は、古式ゆかしき縛りや枠組みを取っ払い、新しい〈美〉の在り方を招聘するでしょう。

どうでしょう、明日は普段メイクをしない人も、マスクの下に超カワイイリップを塗つて出かけてみませんか？ プチプラでもカワイイものはたくさんありますが、やっぱりデパコスリップはテンションが上がりますよ。大丈夫、もし「プレゼントですか？」と聞かれても、にっこり笑つてこう返せばよいのです。「いいえ、自分用です！ きつと、Byeさんがあなたに似合う色やトレンドの色をアドバイスしてくれます。

あるいは、メイクを休憩したい人もいるかもしれません。毎日メイクしていると、お肌も疲れてしまいますよね。こんな時期だから、生活リズムを整えてスキンケアに集中したり、あるいはそこにかけていたお金で本を買ったり、映画を観たり……満ち足りた時間を過ごすことは、人を内面から強く、美しくします。

他人の目から見ても、どれだけ不格好でも、無意味でも、あなたが楽しい・好きだと思つたことには格別の価値がある。それにも、その行動を将来的に「失敗だったな。」と振り返ることがあつたとしても、それはそれでいいじゃないですか。だって、どーせ自粛だし。コロナが収まつて、マスクなしで旅行や、食事に気兼ねなく行けるようになったときに、もつと素敵な自分であるために。自粛期間は、稽古期間です。

サンキュー！ コロナ！ ！ 昨日の自分より今日の自分が100倍カワイイぜっ！ ！！！！

「突発！オンライン寄席」

3年 生田目 幸穂

「コロナ禍のすゝめ」ということで、私からはコロナ禍のご時世に落語をやったことについて一席お付き合いいただきたい。私は青山学院大学落語研究会に所属している。通称青学落研（おちけん）は少人数ながら、互いに切磋琢磨し、日々日本の伝統的な話芸である落語の素晴らしさを後世に伝える活動をしている。

昨年度の春休みには毎年岐阜県で開催している全国的な学生落語の大会である「策伝大賞」に出場したほか、金沢で老人ホームを周って落語をする巡業を行っていた。しかし、時は2020年2月末、新型コロナウイルスが流行し、ご老人の感染の危険があることから、多くの老人ホームへの巡業がキャンセルとなってしまうのである。当時は老人ホームで落語ができなくなるような世の中になったのかとても驚いたし、まさかここまで事態が大事（おおごと）になるとも思っていなかった。思えばこの時から悲劇は始まって

いたのかもしれない。この後もコロナ騒動が終息することはなく、外出自粛で寄席に行くことも叶わず、熱海の合宿もキャンセルになり、部会ができないことから新入部員を確保することもままならず、とにかく落研は大打撃を受けることになった。

しかし某月某日、青学落研に所属している私だが、個人的に落語を披露する機会があった。私はオンラインゲームを趣味にしている。そこで、ネット上の友人とのゲーム中に何故か落語をやる流れになったのである。喋った演目は「つる」というタイトルの演目で、10分くらいで終わるお手軽落語である。

「隠居さん、こんにちわ！」

「おや珍しい。はつつあんじゃないか。今日はどうしたんだい。」

「今日は物知りの隠居さんに聞きたいことがあって来たんだけどよ、ほら、鶴って鳥いるだろ？鶴の掛け軸を見た六兵衛の野郎

が、『鶴は日本の名鳥だ』なんてぬかしやがるんで……」

〔中略〕

「なるほど見た目が綺麗だから名鳥なのか。それにしても鶴ってのは随分首が長いね。」

「そうだねえはつつあん。あんたは鶴の首の長いことを感心するけどね、鶴はその昔、首長鳥と呼ばれていたそうなんだ。」

「ええっ！？どうして？」

「はるか唐土の方から一羽の首長鳥の雄が『つー』といって飛んできて浜辺の松の枝にホイと止まった。さらに首長鳥の雌が『るー』といって飛んできた。だから“つる”と呼ばれるようになったんだよ」

「へえ、それはいいことを聞いた。誰かに教えてやろう。」

〔中略〕

「たっちゃん！どうして首長鳥が鶴になったか教えてやるよ！昔、はるか唐土の方か

ら一羽の首長鳥の雄が、『つるー』って言って飛んできて浜辺の松の枝にホイと止まった。そしたら雌が…」

「雌が？」

「……さようなら」

「いや、何しに来たんだお前！」

「隠居さんにもう一度つるの話聞きに

行ったはつつあん」

「たっちゃんー今度こそちゃんと聞いてき

たから大丈夫だよ！」

「いや別に知りたかねえよ」

「良いから聞きなさいー昔、一羽の首長鳥の雄がね…『つー』と飛んできて浜辺の松の枝に『る』って止まったんだよ！後から雌が…」

「後から雌が？」

「……黙って飛んできた」

以上が「つる」のあらすじである。この落語の面白さの中心は、間抜けな主人公が言い間違えを何度も繰り返す点にある。2回目は隠居さんに聞きに行ったからもう完璧だろう、という期待が裏切られることにより笑い

が発生すると思われる。この演目は演じる噺家（はなしか）によつて、ラストで主人公が半泣きになっているものや、焦りから目があらぬところを見ている感じになっているものなどの違いがあるのも面白い。落語の最大の魅力は同じ話をするにも、噺家によつて違った味わいの作品になる点にある。

この話を演じる上で最も大切に意識すべきなのは首長鳥のくだりで「一羽の首長鳥の雄が！」と言った後、十分な“間”（ま）をとつてから「つー」と言うことである。“間”というのが落語を演じるにはとても重要で、間がないと話が棒読みっぽくなってしまい、途端につまらないものになってしまう。そしてこの演目において、首長鳥がつると呼ばれるには大層な理由があるのだろう、という期待の気持ちを盛り上げに盛り上げるのがこの「つー」の直前の“間”なのである。

そんなこんなでネット上の友人に向けて落語をしたのではあるが、実はその人たちは落語を一切聞いたことがない人たちであった。こんなしょうもない話で、現代の娯楽に

溺れきった人間に笑いを提供できるのかとか、笑いを提供できたとしても視聴者はミュートにしているから笑い声が聞こえなくて不安だとか、心配になる要素はたくさんあったが、そんな心配は無用であった。愛すべきフレンズはチャット欄で逐一短い感想を送ってくれたのである。これはとにかくありがたかった。また、こういった落語の形もあるのだと実感させられた。普段の対面型の寄席では言葉を伴わないリアクションでしか舞台で話している人間とのコミュニケーションをとれない、というところがあるように思える。観客の「ここでそれを言っちゃうの!？」というツツコミも「こいつバカだな」みたいな気持ちも、対面の寄席だと全部笑いで表現されるし、泣ける場面では皆でしみりした雰囲気になる。それだけにこのチャット機能で落語の感想を呟くというのは、落語のリアクションとしてなかなか斬新なものであった。対面の寄席はもちろん恋しいけれども、オンライン落語も捨てたものではないと思える出来事であった。

「隔たり」と「言葉」

3年 堀内 秀平

人と人が隔てられている、ということがこんなにも不自由で苦しいことなのかと、2020年は強く思わされた。元々現代は「離れていても気軽にコミュニケーションをとれる」ことなど当たり前であつたが、それでもやはり、ただ「離れている」と「隔てられている」ことはまったくの別物なのだということを実感した。人と会えない不自由、顔を合わせて言葉を交わすことのできない寂しさ、目に見えないウイルスによって隣人を疑いの目で見なければならぬ陰鬱な雰囲気や世の中に漂っていた。その中で、私はひとつのアニメ作品に出会い、この生活の中でこそ響くとても大切なことを教えてもらった。京都アニメーションの『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』である。

オレット・エヴァーガーデンが郵便社に雇われ、大陸各地に出張して手紙の代筆を行う「自動手記人形」として働くうちに様々な人から「愛」を学んでいくという物語である。物語序盤のヴァイオレットは、兵士として戦うことしか知らず、不器用で、とても危うい存在である。まるで本当に「人形」であるかのよう。しかし、自動手記人形という仕事は依頼者の言葉をただ文字に起こすだけではなく、手紙では伝わりにくいような、あるいは言葉にならないようなわずかな想いを掬いあげて形にしなくてはならない。ヴァイオレットははじめこそ人の複雑な心を理解するのに苦労するものの、多くの出会いと代筆を経て様々な形の「想い」を学んでいき、やがてとても美しく、心のこもった言葉を紡ぐようになる。彼女の成長がそのまま手紙の文面に表れ、次第に彼女を指名する代筆の依頼者が増える。ヴァイオレットの人生と成長を見守るように、物語が展開していく。劇中で大陸の各地に赴き、依頼者の言葉を

手紙にするヴァイオレットだが、彼女が代筆する手紙は「遠くにいる人」に宛てたものばかりではない。時に、とても近くにいる誰かに向けて、なかなか面と向かつては言えないことを伝えるのもまた手紙の役目である。ヴァイオレットは戦争による大陸内の国どうしの物理的な隔たりに阻まれた人々を手紙によって繋げるだけでなく、そうした身近な人への素直な想いをする役目も担うこととなる。そして、美しい言葉を紡ぐよりも、あるいは多くのことを語るよりも、たった一行でも一言でも、素直に想いを伝えようとするその気持ちや人を繋ぐのだということを示してくれる。手紙の自身に何が書かれているかはそれほど重要ではなく、自分の想いを手紙という形にして伝えようとすること自体がすでに深い「思いやり」なのだと思知らされる。それが遠くにいる誰かに向けたものにして、身近な誰かに向けたものにして、その重みは比べられるようなものではない。世界が戦争という大きな隔たりの中にあるからこそ、

身近な繋がりの愛しさが浮かび上がってくる。それをヴァイオレットによつて手紙という美しい形に具現化してもらった人々が、また新しい道を歩き出す。この作品は確かにヴァイオレット・エヴァーガーデンという少女の成長と人生を描いた物語であるが、それと同じくらいに、観る者が彼女が手紙を通して繋いだ人々から「愛」を学ぶことのできる群像劇でもある。

今日における「コロナ禍」という隔たりは、劇中のような、戦争によるものとは異なる。それは今この時に世界中のあらゆる場所や人のすぐそばに平等に横たわつていて、国や地域のみならず、個人どうしの中でも小さな単位の繋がりを断つてしまった。しかし私たちは、その隔たりを超えて「言葉」を交わす術をいくつも持っている。「手紙」は今となつてはその中の主役とは言い難いが、それを書くこととすること自体が大切であるということは、いかなる媒体においても共通であると思う。直接会うことなく、閉ざされた空間の中から連絡を取り合うことの多い現代では、誰かに連絡を取ろうとする意

識そのものに価値がある。送信ボタンを押すまでに、通話開始のボタンを押すまでに、誰に何を伝えるか、その人の顔を思い浮かべて考えるその時間が「言葉」の価値をより高めている。もちろん、顔を合わせて交わす何気ない言葉もとても大切ではあるのだが、あらゆる人が隔たりの中にいる今日では、改めて自分の言葉と向き合い、見直す機会が期せずして与えられたということでもある。そしてそれは同時に、身近な繋がりの価値をいま一度確かめる機会でもある。離れていても、気軽に言葉のやり取りができる時代だ。しかし、その気軽さがあるからこそ、放つ言葉に責任が伴わないということもしばしばある。私たちは代筆に頼ることなく、自らで自らの気持ちを掬つて、責任を持って言葉にしなくてはならない。その相手がどこにいても、どんな言葉を使つても、伝えることの大切さは同じだということを、私はヴァイオレットと彼女の書く手紙に学んだのである。目に見えない隔たりがすぐそばにある今だからこそ、その向こうに投げる言葉がいかに力を持っているかを、彼女は確かに示してくれた。

フレデリック・ショパンが《12の練習曲》Op. 10で追求した音楽とは

4年 岸本 彩葉

はじめに

私は今年で4年生になったのですが、コロナ禍に見舞われたことで、まさか最終学年をオンライン授業で過ごすことになることとは全く思ってもみませんでした。今まで以上に外出しなくなるとことで必然的に在宅時間が増え、当初は色々不安な部分もありましたが、思いの外良かったこともありました。私は西洋音楽のゼミに所属しているのですが、便利なZoom上のツールのおかげでゼミでは様々な人とこれまで以上に会話することができ、昨年以上に楽曲分析の時間に楽しさを感じることができました。また、コロナのお陰もあつてか、『のためカンタービレ』という、大好きなクラシック音楽を扱ったドラマを見る機会にも恵まれました。オンライン上で気軽にアクセスすることができた時代に恵まれたため、ドラマを見ていて改めて聴きたくなった音楽を、勉強する際にBGM的によく流していました。大学に直接通えなくても、音楽に触れて学ぶ機会が失われることはなく、音楽を聴くことや音楽を勉強することの楽しさを改めて実感できる期間でもありました。

4年生になったということで、私は現在卒業論文の執筆に追われています。卒論で扱っている作品はフレデリック・ショパンの《12の練習曲》Op. 10で、この中に収められている練習曲第4番 嬰六短調は、前述した『のためカンタービレ』でも演奏されていた楽曲です。全12曲からなる本練習曲集にはこの《第4番》以外に、「別れの曲」として知られる《練習曲 第3番 ホ長調》や、「革命」として知られる《練習曲 第12番 八短調》も収められています。生涯ピアノ音楽を追求したショパンは、練習曲というジャンルにおいても極めて美しい作品を残しました。ここでは《12の練習曲》Op. 10、中でも私が最も好きな《練習曲 第12番 嬰六短調》を通して、ショパンの音楽の素晴らしさを少しでも実感していただけたらと思います。

1、《12の練習曲》Op. 10——高度な技術と高い芸術性の融合

「練習曲」と聞いて、ピアノを習ったことのある人なら、真っ先に思い浮かぶのは、カール・チェルニーの所謂「30番」や「40番」と呼ばれる練習曲集だと思います。19世紀になると、ピアノの普及とそれに伴うアマチュア演奏家の増加を背景に、ピアノの練習曲集が続々と出版されるようになりました。その中でもショパンの練習曲集は、高度な技術と融合された、その芸術性の高さが音楽史上で特筆されてきました。そこには、ショパンの理想とした音楽の在り方が反映されていました。

練習曲には、チェルニーの「30番」や「40番」に見られるように、その中で練習したい課題を小さな音型の中に凝縮し、そうした音型をひたすら繰り返すことで楽曲を構成したものが散見されます。ショパンの練習曲も然りで、その中には、彼以前に書かれたヨハン・バプティスト・クラマーの練習曲集やムティオ・クレメンティの練習曲集に見られるのと類似した音型を用いたものがあります。クラマーやクレメンティの練習曲集は、ショパンが弟子にピアノを教える際に課題として与えていたものであり、ショパンは彼らの音楽を、自身の音楽を演奏する際の基礎として重要視していたと考えられます。

ショパンはそうした既存の音型を自身の練習曲の中で用いたわけですが、その上で、アルペジオで奏する音域を拡大したり、革新的な運指法を用いたり、ピアノの可能性を広げ、また、ショパンの理想とした繊細なピアノを醸し出せるような演奏を可能にするのに必要な技術を盛り込みました。それらはフランス・リストが繰り出したような超絶技巧と言え程のものではなく、あくまでもそこで追求されたのは、高度な技術と、それに裏打ちされた高い芸術性であったのです。

また本練習曲集には、《第12番》のように「革命」と標題が付けられてしまう程ドラマティックな音楽や、「別れの曲」と称される《第3番》のような極めて美しく繊細な音楽が収められてい

ます。加えて、例えば《第1番》では、アルペジオの音域を拡大することによりその音色の表現が広げられ、且つ、所謂「練習曲」的に同じ音型をひたすら繰り返しながらも多彩な和声で彩られています。このように《12の練習曲》Op. 10に収められている楽曲には、演奏会で披露するのに適うような芸術作品として成立する程の、高い芸術性が与えられていたのです。

即ちショパンの《12の練習曲》Op. 10は、既存の練習曲の在り方からさらに高次への技術も芸術性も高められたものであり、それらの融合により、自身の理想とする音楽を追求したものであつたのです。

2、《練習曲 第4番 嬰六短調》Op. 10-4

《練習曲 第4番 嬰六短調》は、《12の練習曲》Op. 10の中でも屈指の難曲と言われています。この練習曲も特定の音型を繰り返して構成されたものではありませんが、数種類の音型の組み合わせを極めて速いテンポで弾かなければならない所に、その難しさの一因があります。譜例1を見ていただくと、冒頭の4小節だけでも、複数の音型の組み合わせにより、半音階的な音型から始まり徐々に跳躍が織り交ぜられていくといった旋律の変化がお分かりいただけると思います。（音型は譜例上で色分けしています。）さらに、冒頭右手で奏されたこの4小節の旋律は、同様の形で続けて左手でも奏さなければならず、ここにも難しさが有ります。このように技術的な複雑さを生み出している音型の組み合わせですが、組み合わせを変えていくことで、音楽の有するエネルギーが終始途切れないうつ、工夫が施されてもいます。さらに、1音目だけを見ていくと非常に単純な和声進行で構成されているのですが、半音階的な動きや跳躍の動きが織り交ぜられることによって、非常に装飾的で煌びやかな響きが生み出されています。

この練習曲は、ショパンの他の練習曲の多くでもそうであるように、3部形式（A-B-A）＋コーダという、小規模な形式をとっています。第17小節からB部分に入ると、譜例1で示した冒頭4小節の流れが短縮されながら次々と転調を繰り返して、音楽が展開していきます。そして、第33小節からは、減7の和音という不協和かつ印象的な響きを用いて、譜例2のような音楽が構成されていきます。中でも第35-36小節では、右手の跳躍を含んだ音型と左手の下行形のアルペジオにより、左右対称の動きをしながら高音から駆け下りていくのですが、特にこの、不協和な響きでありながら高音から下行していく旋律には、滴がこぼれていくかのような美しさもあります。



終始絶えることのないエネルギーを有しながら進んでいく本楽曲ですが、そのエネルギーは譜例3の第45小節で一度頂点を迎えます。第39小節からは、譜例2でも出てきた左右対称の動きによって徐々にエネルギーを外へ外へ拡充していきながら、減7の和音の響きを持ちつつ数小節かけて徐々に徐々に転調していきます。そうした前の動きとの対照性から、第45小節において、1小節の中で一気に数オクターヴ駆け上がって頂点に達したことによる、華やかで劇的な音楽が際立っているように感じられます。この部分が、私はこの楽曲の中で最も好きです。それに加えて続く第46小節までの2小節は、一気に数オクターヴを駆け下りることで非常に激情溢れる箇所ですが、「このエネルギー

が完全に放出されてしまうことはなく、少し焦らされた後に、2度目のA部分で主調へ復帰します。そこからはほぼ冒頭のA部分と同じ構成を辿りつつ、徐々に音楽に微妙に変化を加えていって、この楽曲のクライマックスにあたるコーダへ入っていきます。



以上ことから、ショパンが3部形式＋コーダという小規模な形の中で、非常にドラマティックな音楽を作ったとみせたということとを、感じ取っていただけではないでしょうか。このように非常に劇的な(第4番)ですが、その一曲前の「別れの曲」として知られる(第3番)とは、調関係上でもテンポ上でも対極の位置にある楽曲であり、その音楽の雰囲気の違いは歴然としています。加えてある研究によると、「(第3番)と(第4番)を続けて演奏するように」という指示が記譜されていたと言います。(第3番)と(第4番)、その対照性が意識されていたのは明らかであり、そこにショパンの作曲家としての振り幅が感じられるような、非常に興味深い工夫が施されています。

生涯ピアノ音楽を追求したショパンは、「練習曲」という一見無味乾燥になりそうなジャンルにおいても、自身の理想とする音楽を追求し、高度な技術とそれに裏打ちされた高い芸術性によって、非常に美しい作品を残したのです。

おわりに

コロナ禍ということで音楽に直接触れにくい状況下に置かれています。青学生であれば、大学図書館のデータベースに有るNaxos Music Libraryから様々なクラシック音楽を聴くことができます。Naxosに「ショパンのためカンタービレ」のミック版に登場した

楽曲のプレイリストも有ります。コロナ禍では勿論のこと、普段からパソコンさえあれば青学生なら気軽にアクセスできるので、ショパンを初めとする数々の素晴らしい芸術作品を、是非聴いてみてください。

最後に、稚拙な文章ですが、本記事を通して、少しでも本作品の魅力が皆さんに伝わり、ショパンの音楽の素晴らしさを実感していただければ、そして、クラシック音楽に少しでも興味を持つていただけたら、幸いです。

参考文献資料

上田泰三『オピオ30番の秘密——練習曲は准作』、東京春秋社、2017年。
 ウォーカー、アラン編『ショパン——その人間と音楽』、和田昌訳、東京白水社、1989年。
 千ゲルテイゲル、ジゼル・ジヤン『弟子から見たショパン——そのピアノ教學法——と演奏美学(増補最新版)』、米谷昭郎、中島弘、訳、2020年。
 千ゲルテイゲル、ジゼル・ジヤン『ショパンの様式』、小沼すみみ訳、東京音楽学友社、1979年。
 音楽学友社編『ショパン』作曲分類曲解説ライブラリー 4、東京音楽学友社、1993年。
 加藤一郎『ショパンのピアノ——その演奏法をめぐって』、東京音楽学友社、2001年。
 小坂裕之『ショパン』作曲家人と作品シリーズ、東京音楽学友社、2002年。
 ノット、アルフレッド・ショパン『改訂版』河上徹二訳、東京新報社、1972年。
 サタケ、ジヤン・ピエール『孤高の創作者——人作品イメー』、大久保賢訳、東京春秋社、2012年。
 プルセル、カミーユ『ショパン』永遠の音楽家、荒木昭太郎訳、東京白水社、1989年。
 ドーリー、アーサー『ショパン』野村正一訳、徳間書店、1983年。

楽譜情報
 譜例1とは、全ての楽譜からの抜粋。
 Chopin, Frederic. *Etudes Op. 10*. Edited by Ernst Rudoff. Friedrich Chopin's Werke. Band II. Leipzig: Breitkopf und Härtel, n. d. [1890]. Accessed May 29, 2020. https://s4.library.utoronto.ca/files/original/45897f7b/MSIP11278-FMLP01969-FCopin_Etudes_Op.10_1B12.pdf

スマホの中の多様性——タイのドラマに描かれるセクシュアリティとジェンダー

4年 山下 実紗

1、はじめに——自粛期間とタイ沼にはまるまで

コロナウイルスによる感染症流行によって私たちの生活は大きく変わることとなりました。外出自粛期間が始まり、最初は料理や掃除など、今まで出来ていなかったことをしようとしましたが、長続きすることはなくドラマとSNSをみる生活をしていました。いかに自粛期間を有意義に過ごすかという情報がタイムラインにあふれる中に、たびたび「タイ BL」「Zgether」という単語を見かけるようになりました。最初はいつか機会があれば見てみようという程度の気持ちでしたが、日ごとを目にする機会が増えたので、検索してみると、「Zgether」とはタイで制作されたBLドラマ *Zgether The Series* のことであり、容姿端麗な俳優さんたちが出演していること、丁度自粛期間にあたる頃タイのテレビで放送されていて、公式からYouTubeにもアップされ、各国のファンが字幕を制作するため、いつでも世界中の人が鑑賞できるようになっていることを知りました。ついに私はYouTubeで数日のうちにシリーズ全作を鑑賞し、他のタイドラマや出演俳優たちのSNSを逐一チェックする、いわゆる「タイ沼」という底なしの沼から抜け出せなくなってしまうました。

2、タイのドラマに描かれるセクシュアリティの寛容さ

最初こそ俳優の外見に惹かれて興味を持ったタイのドラマでしたが、いくつものシリーズを見ているうちに様々なセクシュアリティの人が自然に存在していることに気が付き、心地よさを感じるようになりました。「セクシュアリティ」とは人がどのような性別の人に恋愛感情を抱くか、あるいは人に恋愛感情を抱かないかなどという性的指向を表す単語です。日本のドラマを見ていると、ヘテロ

セクシュアル（異性に対して恋愛感情及び性的な感情を持つ性的指向）しか存在しないのではないかとこの窮屈さを感じる時があります。もちろん近年日本でも多くのBLドラマやセクシャルマイノリティを主題とした作品が作られています。同性愛に対しての過度な称賛や、同性愛者を取り巻くヘテロセクシュアルたちの偏見に満ちた発言（視聴者が違和感に気が付くことを目的とし、差別をなくすために必要な台詞だとしても）に少々苦手意識を感じていました。

私が鑑賞した *Zgether The Series* では恋愛をする当事者だけでなく、周りの友人や家族が、同性に恋愛感情をもっている人物のことを一切否定することはありません。しかし同性愛ということに過度に応援することもなく、ただただ主人公たちの恋路に寄り添う様子が描かれています。多くのタイのBLドラマシリーズでは主人公二人だけではなく、友人たちの恋愛模様も描かれおり、ヘテロセクシュアルのカップルや、女性が自分の恋愛対象は女性であると発言する場面も登場します。これらのことから私は、タイのドラマではセクシュアリティが寛容に描かれていると感じています。

3、あるべき世の中を描くタイBLドラマとタイの若者文化

タイでは1990年代にBL漫画や小説が日本から輸入されていましたが、5年ほど前からBLドラマが作られるようになったそうです。 *Zgether The Series* を制作したGMM TVでは2016年に伝説的な人気を博した *SOTUS The Series* など、多くのBLドラマを制作しています。他のテレビ局もBLドラマを制作しているという現

状からタイ国内でのBLドラマ人気がうかがえます。2020年12月3日に、GMM TVの2021年新作ドラマ発表会がありました。GMM TVの代表取締役によれば、2021年以降はBLドラマ制作数を増やし、年間6作品の放送を目指すそうです。

それではどのようにドラマを通じて様々なセクシュアリティを描いているタイでは、社会全体が同性愛などに寛容なのでしょうか。実はタイで「市民パートナーシップ法案」が承認されたのは2020年7月8日と最近のことです。この法案は養子縁組や結婚とほぼ同等の権利を同性カップルに認めるものです。アジアでは、台湾に続いて2番目の同性パートナー法を承認する国となりました。7月7日夕方頃、タイドラマの出演俳優や監督たちがSNSを通じて法案可決を盛り上げる投稿を見かけました。社会が寛容だから多くの作品に恵まれていると思っていた私は、このニュースを知り、作品を通してあるべき世の中を描き、戦い続ける姿勢を見ているのだということに気が付きました。実際に *SOTUS The Series* の続編、 *SOTUS S The Series* では第三者同士が他人のセクシュアリティを暴露する「アウトティング」について描かれ、 *Dark Blue Kiss The Series* ではシングルマザーの家庭で育ったカオが、社会で真の当に生きていくために、そして自分のセクシュアリティによって愛する母親を失望させないためにカムアウトが出来ずに悩む様子を描いています。市民パートナーシップ法案可決の声を上げたときのように、俳優たちは私たちと同世代でありながら、よりよい社会のために声を上げているということに感銘を受けました。最近タイでは民主化を求める反政府デモが起き

ていますが、その際にも多くの俳優たちが市民を暴力によって制圧する政府側の様子を拡散し、タイで何が起きているのかを世界に発信していました。このように自然に声を上げているタイの若者を見て、より作品を応援しようと思うと同時に、タイや自分にとって一番身近な日本の現状を調べたり何ができるかを考えたりするきっかけをもらいました。

4. タイドラマのジェンダー描写について

セクシュアリティの多面性を描くことには長けているタイのドラマですが、ジェンダーの描写にも挑戦的だと思える部分があります。「ジェンダー」とは、社会の中で形成される性別のことを表す単語です。つまり「家事は女性がするものである」などといった考え方は過去から現在にかけて蓄積されたジェンダー規範ということになります。現在 GMM TV で放送中の BL ドラマ Tonhon Chonlathee の主人公の一人である Tonhon は執拗に男らしさを周りに強要する人物として描かれています。同性愛者を嫌い、身の回りの友人たちも自分と同じようにセクシュアリティだと決めつける Tonhon が、幼馴染や弟のように思っていた Chonlathee からの恋慕の感情に気が付くことで物語が展開します。今この原稿を書いている段階では、Tonhon は、

ルームシェアをしている Tonhon を含む 4 人のうち 3 人がゲイでありながら彼の差別的な言動にゲイ男性が恐れてカムアウトできないという状況を作り出し、男性は女性に幸せにしろというものだという父親の教えを信じて疑わないという様子が描かれています。まさか Chonlathee が Tonhon に恋愛感情を抱いているなどとは微塵も思いませんが、これからの Tonhon の心情の変化や、自身の心の指針としていた男らしさから解放される

ことを期待しています。

普段楽しみなが鑑賞しているタイの BL ドラマですが、アップデートされるべきだと思う部分もあります。今年有斐閣から出版された『BL』の教科書』に所収されている「ポルノ」と BL——フェミニズムによるポルノ批判から」において堀あきこ氏は、BL の設定では、攻めと受けキャラクターが、従来男性女性の恋愛様式の根底にある、「支配—従属」の関係性を反映しているが、2000年代以降それを覆す設定も出てきていると指摘しています。しかしタイの BL ドラマでは多くの場合「支配—従属」の関係性によつて攻めと受けキャラクターが描かれているように思います。受けキャラクターは攻めキャラクターよりも背が小さかったり、か弱い性格だったりするように描写されています。また攻めキャラクターによる、暴力的な発言によつて傷つけられても一途に思い続ける受けキャラクターも「支配—従属」の一例といえるのではないのでしょうか。このような問題点が提示されている BL というジャンルについて、タイではどのように問題点を解決しながら視聴者を楽しませていくのかという変化を観察したいと思っております。作品を愛しながらも、よりよい姿について考えるようになったのもタイ BLのおかげです。

5. コロナ禍

今回コロナ禍で出会った芸術というテーマで、タイのドラマとの出会いや魅力についてお話ししました。このような書き方が不適切だということは承知していますが、コロナウイルスによる感染症流行の自粛期間がなければタイのドラマに出会うことはなかったと思います。タイのドラマをきっかけにセクシュアリティやジェンダーについて知識を深めることにもなりました。今年の6月まではYouTube

上でほとんどすべての作品が鑑賞できましたが、現在日本の企業による版權の買い取りによつて YouTube 上で見られる作品は減ってしまいました。しかし2020年11月27日、GMM TV とテレビ朝日の提携も発表されたので、近々より日本で気軽に楽しめる日が来るのではないのでしょうか。タイのドラマを見て、セクシュアリティやジェンダーについて考えるきっかけになればとてもうれしいです。

参考文献

書籍

ウエルカー、ジェームズ編著『BL』が開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』東京：青土社

2019年。

堀あきこ、守如子編『BL』の教科書』東京：有斐閣、2020年。

ウェブページ

上田裕資編『タイで同性婚が事実上合法化、台湾に次いでアジアで2番目』、Forbes JAPAN、2020年7月10日、
<https://forbesjapan.com/articles/detail/35744>

2020年12月15日閲覧。

大塚智彦「タイ発『BL』ドラマが大ブレイクする納得の事情——「GBT」に寛容な社会の背景にあるものは、」東洋経済オンライン、2020年9月13日、
<https://toyokeizai.net/articles/-/374855?page=2>

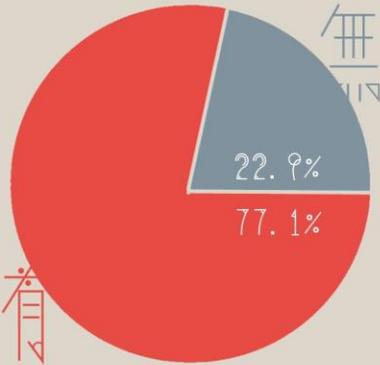
2020年12月15日閲覧。

1 堀あきこ、守如子編『BL』の教科書』(有斐閣、2020年)142頁。

自粛前と後の気になる変化はある？（自分のことや芸術、世の中のこと）

清潔を意識するようになった 当たり前前の生活のありがたさを感じた
太った 映画が身近になった オンラインで芸術が楽しめる 芸術の制限が悲しい
 パイトができない、見つからない 生活リズムが乱れた 予約制の美術館が快適 **就活が不安**

自粛中に新しく始めたこと
ハマったことはある？

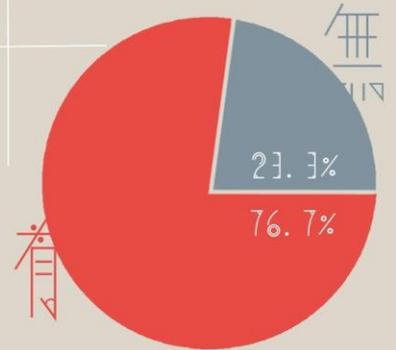


それを教えて！

1位 ゲーム

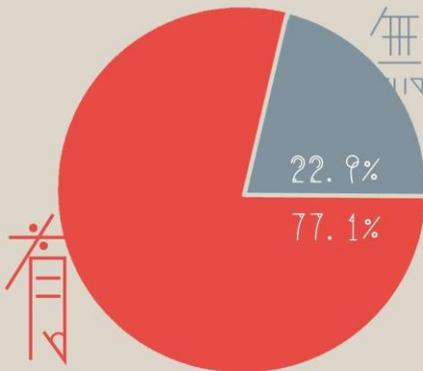
2位 お菓子づくり・料理

3位 カメラ・アイドル・KPOP・アニメ



それはまだ今でもやってる？
ハマってる？

配信ライブやオンライン展示会など
コロナ禍ならではの経験はした？



Thanks to
 コロナとひげ活アンケート
 コロナと大学生

それはどんな経験？

オンラインでの

映画上映
配信
サークル

ライブ
観劇
青山祭

自粛を経て（色々解禁されて）
1番嬉しかったことは？

- 1位 友達に会える・遊ぶこと
- 2位 ライブ（オンライン含め）解禁
- 3位 舞台・ディズニーに行ける
友達と飲みに行ける

演劇（やっぱ生がいい！）リモート合唱

ヨコハマトリエンナーレ

カミュ『ベスト』（コロナになった途端
露骨にもてはやされてうんざり）

無観客ライブ

バンクシーの
医療従事者に
向けた作品

感覚ピエロの
『感染症』

ツイッターで流行った

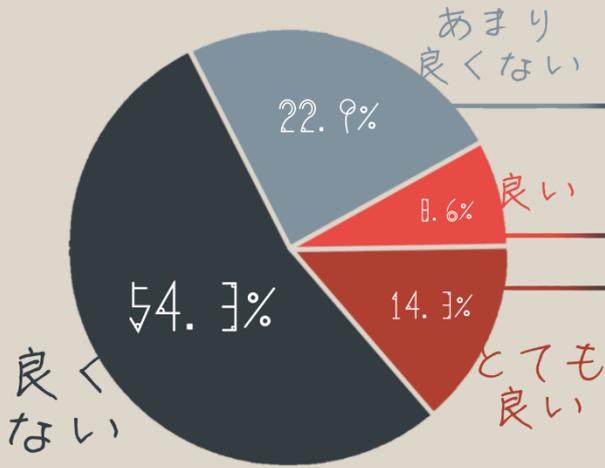
「有名絵画になってみた」オンラインレッスン 『TENET』

コロナ禍で
印象に残ってる
芸術は？

コロナ禍のススメ！（こんなときだからこそそのアイデアなど）

自己表現 自分と向き合ってみる 読書（宮沢賢治とてもおすすめです）**資格を取る**
 近所を開拓すること。瞑想 自分磨き 趣味に興じる、見つける
 睡眠を堂々と長時間とる！！ 人間関係の断捨離 ペットを愛すべし！笑 部屋の片付けをしてみる

ぶっちゃけオンライン授業 どう思ってる？



良い
いつでもどこでも/寝れる/通学時間がいらぬ/自分の時間を確保できる/録画・巻き戻しができる/パジャマで受けられる/人と会わなくてもいい/家から出なくていい

悪い
コミュニケーションが取りにくい/授業態度が悪くなる/友達と会えない/システムの調子に左右される/課題をやり忘れる/つまらない/孤独感/授業の質が落ちたと感じる/学費に見合わない/著作権の関係で映像や資料が見れない/授業での鑑賞の機会が減った

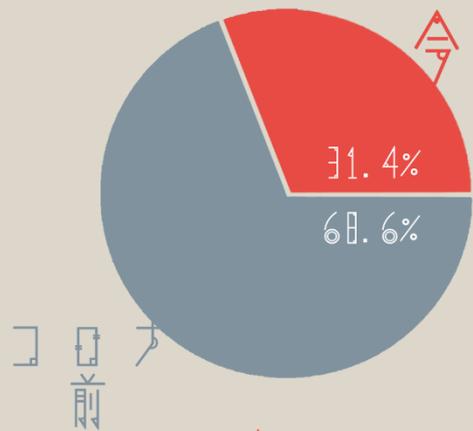
今後の芸術関連でみんなにオススメしたいことは？

オンライン配信のバーコボリ 普段見ないような観劇・演奏会 N響のラジオ配信 アーティストを聞いたりする
美術館などの予約制の展示が「スターウォーズ」
本当に快適で便利なので、
美術館などの予約制の展示が「スターウォーズ」
とりあえず舞台観て、楽しいよ
絵本の絵 交響曲を聞く
あつぱり映画、
あと劇団四季をそろそろ
見に行きたいなあ
だれか一緒にどうですか
Netflixで配信されているセックス・エデュケーションというドラマ (観ると見ると驚きでやめた方がいい)
パーチャルの世界で表現すること
スピッツのライブ配信を是非見てください!

ヒゲのみんなにメッセージ、感想など

早くひげのみなさんにお会いしたいです...！ はやくゼミ生で遊ばたいな～！
そしてみなさんの好きな芸術について布教してほしい...！
皆大好きよ♡
早く同期や先輩のみなさんにお会いしたい気持ちでいっぱいです！
オススメの芸術作品などシェアしましょう♡ 愛してるよ

早くコロナに対する特効薬が出ますように。



「コロナが完全に
おさまったら何が
したい？」

多かったのは海外旅行・国内旅行、友達と遊ぶ、生のライブやコンサート・観劇、早くサークルに入りたい、直接友達と会ってみたいという一年生の声も。
もはやおさまらないだろう、何もしたくないという声も...

コロナ前と今の生活 どっちがいい？

まとめ

アンケート担当者 犬飼ゆうり

自粛期間やその後のコロナ禍の生活で、新しいことを始めたり新しい芸術の形に触れたり、前向きにこの状況をとらえ楽しんでる人が多かったです。その一方で、オンライン授業や家の中で過ごすことが増え生活リズムが乱れたり不安を感じる事が増えたりという声も多くいただきました。今まで当たり前だった、友達と遊ぶ・会う、普通の大学生生活を送ることのありがたみを感じているという声に、私もその通りだな、早くみんなに会いたいなと強く思いました。

特に、「1年生の方々はまだ同級生に直接会った」とが無い、友達ができない、部活・サークルに入れない等、私たちが以上に大きな不安と寂しさを抱えていると実感しました。さらに、「他の人に比べて芸術が格段に好きでないが人権はあるか？」という相談もいただきました。これから比喩でたくさん分野の芸術を学び、触れるうちに何か1つは必ず心惹かれるものが見つかると思います。そして、今回のアンケートのようにひげの皆さんがいろんな芸術を教えてくださいたいと思います！このアンケートを話のネタにでもしていただいで、みなさんの友達作りやひげ活に彩を添えることが出来たら嬉しく思います。私もこのアンケートで上がった芸術作品やおすめを体験してみたいと思います。

今回は「協力
ありがとうございました!!」

日本におけるコロナ後のオープンマイクのあり方について

2年 丸岡雅弘

オープンマイクはライブハウスやパフォーマンスイベントにおいて観客が飛び入り参加できる形式の催しである。主にヨーロッパやアメリカではポピュラーなものだが、近年になって日本でも飛び入り参加型の催しものが各地で行われるようになってきた。しかし未だに日本では一般的なものとは言えないのが現状である。

では日本において、オープンマイクはどのような形で行われているのだろうか。

まずは二〇〇二年に行われた地球環境を考えるイベント「アースデイ」におけるオープンマイクがある。このイベントでは即席のカフェでオーガニックな食材を使った料理やコーヒートを飲食しながら、音楽や芸術、環境に関する知識人の講演を通して環境問題について考えを深め、発信していくことがコンセプトとなっていた。このイベントを発案したシキタ純は、人と人をつなぐ役割、人と社会をつなぐ社会問題に主体的になる役割としてのオープンマイクの意義を朝日新聞で語っている。

このように日本においてもその認知度こそ一般的ではないものの、人と人との繋がりを生み出し、社会に変化を与えたりそれぞれの

人の視野を広げたりするというオープンマイクの特徴はしっかりと機能している。しかしそんなオープンマイクも新型コロナウイルスの影響で中止になるという状況が生まれていく点から、ライブハウスを例にその影響をみてみよう。

まずライブハウスの魅力は人と触れ合い、一体感を共有するところにあるが、新型コロナウイルスは密閉、密集、密接という「三密」と呼ばれる状況を好むため、活動を自粛せざるを得ない状況にある。また集団感染がライブハウスで相次いだことから、自粛要請解除後も徹底した感染予防策を講じなければならず、ライブハウスの本来の魅力を伝えることができていない。活動を制限するライブハウスやアーティストも多い。

またオープンマイクを行なっているカフェやバーといった中小企業もコロナ禍で経済的に深刻な影響を受けている。特に小規模店舗では休業、廃業を選ぶケースが多く、数字で示される倒産よりもその数は多いという。

しかしこのような困難な状況であっても、感染症対策をしつつオープンマイクを再開す

る動きは徐々に増えてきている。コロナ禍を乗り越えて、これからのオープンマイクはどのような形態になっていくのであろうか。

外出自粛期間において、個人レベルではテレワークや「おうち時間」というものが推奨された。感染拡大を防ぐことが目的だったが、この「新しい生活様式」と呼ばれる動きは、私たちとインターネットとの距離を今以上に近くした。これからのオープンマイクでは、このようなオンラインでの活動と、オープンマイクならではの人と人との生の触れ合いを両立させていくことが大切だ。例えば人数を制限して予約制でオープンマイクを開催しつつ、店側もしくは表現者がオンラインでその様子を発信するということが考えられるのではないだろうか。オープンマイクを予約制にすることによって、表現者は少なくとも一定の観客に向けて演奏をすることができ、人数が多すぎるときよりも、それぞれがコミュニケーションを通して得られる情報の密度は上がるように感じる。またその様子をオンライン上で発信することで、不特定多数の人がその様子を見てオープンマイクに興味を持ったり、そのお店の雰囲気を知り行ってみ

たりすることで店側の新たな客層の開拓にもつながるのではないだろうか。

私の経験としては、オープンマイクではないが十月に友人が主催のライブを観に行ったことがある。ライブは小さなライブハウスで行われたが席数は制限されていて、人が少ない印象だった。またステージ上にはシートが下げられており、演者の飛沫が客席に届かないような感染対策もされていた。この時に一番印象に残っているのが、オンライン配信である。小さなライブハウスなので、店側はオンライン配信をする準備が予算不足によりできなかったが、演者が個人的にインスタグラムなどを通してフォロワーや不特定多数に配信をしていたのだ。配信を見る人はその演者のフォロワーが大多数であったが、ライブの収容人数がおよそ二十人くらいだったのに対してオンラインで見えてくれた人はライブ時間を通して三十人だった。またライブ後にその映像をアーカイブで残すことで、後から見たという人も少なくない。あらかじめ配信の予告や、効果的な宣伝を行えば、さらなる視聴者の獲得につながっただろう。このようにお金をかけず、個人と個人がインターネットを

通してダイレクトに繋がれるということの強みをオープンマイクにも活かすと良いと考える。

オープンマイクの良いところは、アーティストと客が垣根を越えて交流することができる。誰でも自己表現することができるという点にある。またステージに立って発表するという、普段は経験できないことを誰でも経験できることも長所と言える。この良さをコロナによって潰してしまうのではなく、コロナによってポピュラーになった新しい技術を利用し、今までのオープンマイクにはなかった店舗の垣根を越えたたくさんの人との交流を通して、自分の新しい可能性を発見し伸ばしていく。コロナという困難を乗り越えたからこそ、日本においてオープンマイクが一般的になり、誰もが表現者としての活動を楽しみ、幸せになれる世の中がくることを切に願う。

大禍のなかで

映像系部活動の小さな話

3年 榎将吾

はじめに

コロナ禍での映像制作が半ばドキュメンタリーのごとく発信されるようになって久しい。ただしそれは、プロや既に才能を見出されているものに限られる。以下に記されているのは、比較芸術学科で映画を専攻し、映像制作の部活動に所属している、ちっほけな学生の小さな話である。

リモートドラマはやる気にならない

部活動（青山学院大学放送研究部）をリモートでやらざるを得なくなると、脚本に関心のある人を募り、LINEグループを作った。活動は全てオンライン会議ツールZoomを使用。最初はAmazon primeにある映画と一緒に観たり、感想を言い合ったりした。リモート作業にある程度慣れてきた五月頃、いよいよ皆で脚本を書き、持ち寄って意見交換するようになる。それも慣れてきたので、「リモートドラマを書きませんか？」と提案してみた。ちょうどNHKの『今だから、新作ドラマ作ってみました』や『Living』というリモートドラマが放送され、お手本がない脚本を書くくらいなら、撮影可能なも

の書いた方が良いのではないかと考えたのだ。ところがグループメンバーの反応は「書けと言われてたら書きますけど…」だった。正直これには驚いた。平静を保とうとする程度には驚いた。「通常通りの脚本を書いて腕を磨きたい」というのが彼らの意見。また、先生（比芸ではない）にリモート作品は繰り返し見たくならないからダメ、と言われたからという人もいた。確かに私自身、上記の二つ以外はほとんど見ていない。特にZoomのあの画面に満たされた作品は、再生ボタンを押す気にもならなかった。三角印のボタンが異世界へ飛ぶスイッチだとすれば、Zoomドラマのそれは最初から機能不全に陥っている。実際、一二月現在はほとんど廃れて、テレビドラマは以前の映像形式に戻った。あの頃、スマホやパソコンのカメラ機能を駆使してドラマ撮影をした人たちは、それがなければ食べていけないプロの人か、よほど熱意に溢れた人に違いない。平凡な部活に所属する、ごく一般的な大学生にとって、リモートドラマはやる気にならないのだ。

学生作品と著作権

青山学院大学放送研究部では、他の部活やサークルと同じく、新歓行事を行なってい

る。部費や活動事例を紹介する説明会に、話題作りのため先輩が後輩を質問攻めにしてしまう食事会。これらはごく一般的であるが、放送研究部ならではの種目もある。上映会と撮影体験会だ。上映会は言わずもがな、部で制作した作品を教室のプロジェクトで流すもの。撮影体験会は、MVをその日のうちに撮影し編集するというもの。新入生はだいたい十数人参加してくれるので、先輩と組んで五班くらいになる。だが今年是非対面が必須条件であるために、これら全てをリモートに置き換えなければならなくなった。説明会はZoom等を使用すればどうにかなる。食事会も、要は先輩と後輩が話せば良いので、同じくZoomを使用。インスタライブを活用したりもした。問題は上映会と撮影体験会である。「えっ、撮影体験会が出来ないのとは分かるけど、上映会は簡単じゃない？」と思う人がほとんどだろう。ところがどっこい、オンラインでの上映会は、学生作品の形態が実施を難しくさせているのだ。受賞して新聞に掲載されるような、大勢の人に見られる作品のことではない。他大学の放送研究会（サークルの場合は「会」になる）や、知り合いを発表会に呼んで見てもらう程度の学生作品は、著作権を無視しているものが多い。権利関係

に気を使っていると一目置かれるくらいだ。小規模の上映会なら特にお咎めもないのだが、オンラインでは事情が違う。新入生でもアクセスしやすいプラットフォームを考えれば、自ずとYouTubeになる。当然権利関係は厳しい。最終的に取った対応策は二つ。一つは交流会も兼ねて、Zoomで五分程度の短い作品を流すこと。もう一つはYouTubeの限定公開。LINEで個人的に話しかけてきた人に見せる方法だ。正確にはこれでも著作権に違反しているのだが、コロナの状況下では止むを得ないということからの決断だった。

秋のオンライン上映会

様々な映画祭がオンラインでの開催を決行する中、青山学院大学放送研究部でも「オンライン番組発表会2020」という上映会を開催することになった。コロナによって上映の機会を逃していた作品が複数あり、著作権もクリアしていたためである。新歓期のリベンジマッチだ。例年は、青山キャンパス一七号館にある本多国際会議場を借りていたが、今年の会場はYouTubeのプレミア公開。個々の作品をつなげてアップロードするだけではないが、上映会の体裁を保つため、OPとE

D、さらには幕間映像を少数の部員でリモート制作することになった。この課題は一人で撮影可能な主観映像を分担して確保することで、なんとかクリア。今はスマホという誰でも高画質で撮影できる便利なものがある。もともと私は、より高画質で撮れるSONYのミラーレス一眼α7iiを使用したのだが、これにてオンライン上映会は無事公開に至った。一つ言い忘れていたことがある。上映会の最初に流れる作品が、一年生数人によるものということだ。三年生の私が撮れなかったリモートドラマを、映像の代わりに写真を使用してではあるが、入ったばかりの後輩が作ったことは嬉しかった。こんなちっぽけな世界でも、コロナのような状況を打破するのは、新しい世代なのだと思った次第である。

おわりに

青山学院大学放送研究部に、私は一年次から所属している。現在まで三本の短編映画を監督。どれも映画祭にノミネートされるようなものではないが、今年度は集大成となるものを撮ろうとしていた。そこにやってきたのがコロナである。対面授業が再開される来年こそはと思っているが、少し立ち止まって、

こうして小さな話たちに思いを馳せるのも悪くはないだろう。上記の「オンライン番組発表会2020」はアーカイブが視聴可能だ。YouTubeで「青山学院大学放送研究部」と検索して、ぜひ再生してみたい（私の作品『アオヤマスパイクロニクル』は三十六分）。コロナ禍における、平凡な部活動の、ごく一般的な学生たちの奮闘の一部が、そこに映っている。

コロナ禍での芸術鑑賞のすすめ

3年 町田大悟

コロナウィルスが未曾有の猛威をふるい、私たちの生活は一変した。それは芸術鑑賞に関しても同じことで、都市部の美術館・博物館に集積された作品をそこに赴いて鑑賞するという鑑賞法からの変化を余儀なくされたと言っても良いだろう。オンラインミュージアムのように家にいながら作品を鑑賞するという試みも多く行われているが、やはり実際に作品と対峙するに勝る鑑賞体験はないと私は考える。しかし、かくいう私もいわゆる「自粛生活」においては、ウェブサイトや写真にて作品を見るのみで、あまり芸術鑑賞の機会には恵まれず、大学で芸術を学ぶということの意味を反芻するばかりであった。その中で、私はふと地元の自治体の文化財情報を目にし、地元の文化財を見ると鑑賞体験をしようと思いついた。実際に地元の文化財を鑑賞する試みを行った。このことから、本稿では「コロナ禍での芸術鑑賞のすすめ」と題して、仏教美術を例に地元の作品を改めて鑑賞した体験を紹介したい。この記事を通して、大学にて養った芸術鑑賞の眼がそれ以前よりも新たな発見があるかということを確認し、地元の作品を再発見すること、コロナ禍の中での作品鑑賞の機会としてもらえれば幸いである。

私が住む千葉県柏市は、旧水戸街道が通り、隣の松戸市と並んで時宗に関連する文化

財や近代キリスト教美術、下総地域の豪農の旧邸宅などの多彩な文化財が保存され、主に中世以降、特に近世の作品を多く擁する自治体である。

柏市における寺院の展開は、「関東三弁天」の一つとして知られる紅龍山東海寺の開山が九世紀に遡るといふ伝承によって始まる。中世には、いわゆる鎌倉新仏教の時宗、曹洞宗、日蓮宗の寺院が開かれ、十六世紀以降になると、再び新義真言宗の寺院が隆盛を見せる。今日の市内には真言宗豊山派を中心として、鎌倉新仏教の諸寺が少ないながらも存在している。(1)

今回私が訪れたのは、柏市指定文化財である観音堂がある福寿院である。福寿院は、近世末に建てられた茅葺きの屋根の観音堂を持つ。その中には、秘仏本尊の十一面観音を厨子に納め、本尊の右手側に、両腕・右脇侍を失ってはいるが、不動明王二童子像と見られる坐像、忍者のように人差し指を立てた右手を左手で包み込んだ金剛智拳印を結ぶ大日如来坐像、胸前で両手を合わせる手勢をとる覺鑊と見られる高僧像を安置する。左手側には従来の図像に倣った、右手に金剛杵(2)を持つ空海像、頭に龍を戴く難陀龍王像、同じく頭上に宝塔(3)を戴き、難陀龍王と同じ服装の兩童子像を安置する。本尊は本来公開されてはいないが、堂内に本尊の写真パネルが展示されている。福寿院の方曰く、本尊は五

十センチほどの小像で、中世末まで遡る作品であるとの説明を受けた。頭上面を欠損しているが、衣文をはじめとする様式から、十六世紀ほどの作品であるように見受けられた。本尊が中世にまで遡ると同様に、寺院自体の開山も同時期まで上がるという。

ここで、改めて安置されている諸尊像について確認したい。福寿院は真言宗豊山派の自院であり、ここにおいて着目すべきは難陀龍王と兩童子である。この二尊は、十一面観音の眷属であるとともに、昨年の東京国立博物館での企画展示である『奈良大和四寺のみほとけ』展にて、長谷寺の本尊十一面観音像の脇侍として安置されている中世の作例が展示されていた。(4)この二尊が安置されていることから、福寿院の難陀龍王・兩童子の両者は、秘仏本尊と三尊の形態にて一具で安置されていた可能性が考えられる。

また、秘仏本尊の十一面観音像は、現在では他の十一面観音立像の作例と同じように、左手に水瓶をもち、右手を垂下させる形を取っている。しかしながら、豊山派と関わりが深い長谷寺と同じ三尊の構成が考えられることから、当初は長谷寺十一面観音像のように、右手に錫杖を持つ形態であった可能性も同時に考えられる。柏市内には、豊山派の寺院が多く存在していることは先に示した通りであるが、平成の大規模調査にて、市内豊山派寺院には空海・覺鑊の二大師を竝座の形で

あらわし、不動二童子像や金剛界大日といった密教尊を安置するという福寿院と同様の事例が多く見られたほか、十一面観音も複数確認されている。それらは福寿院本尊と同様に、右手を垂下させ、左手に水瓶を持ついわゆる長谷式観音の姿である。しかしながら、十一面観音と同時に難陀龍王・雨宝童子の二尊が確認されていない。⁽³⁾この点において、福寿院は中尊のみをあらわす他の寺院とは異なり、三尊の形で長谷式観音を伝える点で特異であるとともに、本尊の製作年代が十六世紀に遡ることを勘案すれば、柏市内における十七世紀以降の豊山派寺院の展開において中核的な役割を果たしていたという可能性も捨てきれない。

市指定文化財の観音堂は、先述の通り茅葺きであり、三間の内陣の前に外陣がつき、四方周囲に濡れ縁を巡らせる。堂内の装飾として内陣中央の厨子の柱にあらわされた象の頭のモチーフは内陣の荘厳にあらわされる。同様に、獅子の頭のモチーフは堂宇の正面に龍と配され、堂内の外陣と内陣とは聖なる空

間としての区別がなされているが、堂宇の中と外でも聖俗の区分が内在している事がこれらの装飾からうかがえる。このように、観音堂の荘厳は中の厨子と同様のイメージを反復する形で行われているが、厨子の屋根は瓦葺きである。ここにおいて、やはり仏像が坐す場所は人の生活する場所とは異なるということを示すもの、寺院という聖俗の境界ともいえる場所では、人の住む場所の性格を引き継ぎながらも、聖なる性格も併せ持つということをあらわした例といえるだろう。

先ほどは、茅葺き屋根を人の営みの代表として示したが、現在の柏市内には元は茅葺であったものの、それを銅に葺き替えた急峻な屋根を持つ建築は散見される。しかしながら、いまだに茅葺きを守り続けているものは少ない。福寿院観音堂の茅葺き屋根を保存してゆくにあたって、費用のみならず、葺き替えるの職人を見つける事にも大変な苦労があったという話を寺院の方から聞き、この風景が単に古様な建築であるということだけではな

く、昔から信仰の場として機能し、人の関心を保持し続けてきたために保存されているようにも改めて見えた。

以上のように、地元の作品を改めて鑑賞するということによって、私たちが大学にて学ぶ芸術の体系が自身の住む地域にも存在していることが確認できたとともに、大学での学びによって、今日に残された作品から、作品同士の関係性を有機的に考察することが可能となった。さらには、文化財を間近に見るという体験の類い希さを再確認するとともに、今後の未来においてこれらの作品を保存してゆく事への意識というものも養えた。これまでオンライン講義ばかりで、小さな画面の中でしか見て来られなかった芸術作品を実際に自分の目を使って、生の作品と対面し、確認することで、大学での学びというものをより身近に感じ取れるのではないだろうか。閉塞したコロナ禍の中での芸術鑑賞として、自分と近い作品を見ることをしてはいかがだろうか。

(1) 『柏の仏像―柏市内仏像等調査報告書―』、柏市教育委員会、一九八九年による

(2) 密教で用いられる法具のひとつ。もともとは古代インドの武器であり、全ての煩惱を破る力を持つとされている。

(3) 仏塔のこと。本像では、上層は相輪と傘、下層は円柱形によってなる。

(4) 特別企画『奈良大和四寺のみほとけ』(展覧会図録)、東京国立博物館、二〇一九年による

(5) 註(1)参照

二〇二〇年の演劇

『ペリー・エリオット』上演の「奇跡」と「軌跡」

4年 井上花菜

二〇二〇年四月七日。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、緊急事態宣言が発令された。私達の生活はこれまでとは一変し、今までの当たり前が当たり前ではなくなつた。

ブロードウェイでのヒットミュージカルの日本初上演や、人気作の再演を含め、大いに盛り上がりを見せるはずだった二〇二〇年の演劇界は、窮地に立たされた。上演中の作品、全ての準備を終え開幕直前であった作品、あと少しで稽古が開始されるはずだった上演予定作品、その全てが公演中止を余儀なくされた。私自身が出演していたミュージカルも途中で公演中止となり、役者仲間の出演する作品や観劇を楽しみにしていた作品の公演中止のお知らせを目にするたび、悲しみと悔しさで押しつぶされそうであった。この状況は日本だけに収まらず、ブロードウェイ、ロンドンをはじめとする世界中の劇場が閉鎖され、作品の上演を中止せざるを得なかつた。劇場という空間で、大勢の役者と観客が一つになって同じ時間を過ごす「生もの」であるからこそ、集まって語り合い、共に考え動くことで生み出されるものが「演劇」だからこそ、感染症との相性は非常に悪かつた。

ミュージカル『ペリー・エリオット』も、二〇二〇年に上演される作品の一つであった。二〇一七年に日本で初演を迎えており、大盛況のうちに幕を下ろした。二〇二〇年の上演は待望の再演であった。私は初演に引き続き、今回も出演することが決まっていた。思い入れがあり、大好きな作品に再び関わる事が出来るのを非常に楽しみにしていた。しかし、本来は四月から稽古が始まり、七月から十一月にかけて上演予定だったが、緊急事態宣言下では稽古が出来ず、稽古が出来なければ上演は出来ないため、七月と八月、二カ月分の公演中止が決定した。このまま愛する作品の中に生きることなく終わってしまうのではないか、共演者の皆様にもお会いできぬまま公演が中止になってしまうのではないかと、そんな不安が頭を過つたが、稽古再開まで皆諦めることなく、九月の開幕を目指しそれぞれが準備していた。

緊急事態宣言が明けてしばらく経つた七月。待ちに待った稽古再開。今までは打つて変わった環境での稽古であった。稽古場に入るために毎回検温をし、すぐさま手洗いとうがいをを行う。稽古場へは外から着てきた私服での立ち入りは禁止であるため、まず更衣室にて稽古専用着に着替える。更衣室も入室は最大四人という人数制限を設けていた。稽古場の至る所にアルコール消毒液が置かれ、何をやるにもこまめに手指の消毒を行う。マスクは外用と稽古用で分け、どんなに激しく歌い踊る場面でも着用は厳守であった。ソーシャルディスタンスの確保も厳守で、休憩中でも私語は厳禁。何か用がある場合は面とは向かわず、マスクを着用した上で鏡越しでの会話のみ許されていた。稽古は一時間ごとに休憩をはさみ、換気と稽古場の消毒が行われた。小道具は使う度に毎回消毒し、物の貸し借りは一切禁止であった。普段なら必ずあったケータリング台や差入れも撤去され、飲食は全て各自で用意。給水する時の手指の消毒は義務となり、軽食の摂取は別室の飲食専用スペースでしか許されず、そのスペースも一人ずつアクリル板で仕切られていた。稽古以外での外出はなるべく控えてほしいとのことであったので、他者との外食や接触、カンパニーのメンバーで親睦会を行うことも禁止であった。

他にも沢山の細かい規制があつたが、ここまで書いたものだけでもやりすぎなのではないかと思う人もいるだろう。しかし、この状況下で舞台を上演するということが、稽古を進めるということは、これほどまでに関係者の一人一人が責任感を持たなければならぬことなのである。誰か一人でも、何か少しでも気が緩んではいけない、何かあれば公演中止

の危機にさらされる、「明日、何が起ころるか分からない」という非常に強い緊張感の下、稽古が進んでいった。

俳優も慣れないことに戸惑いながらの稽古に苦労したが、より大変であったのはスタッフの方々である。通常業務だけでも目が回るほどの作業量であるのに、感染症対策も加わり、想像を絶する多忙さであった。しかし、誰も文句や不満は漏らさなかった。関係者の誰もが、ただ一心に無事に開幕することだけを願っていたからこそであった。数回にわたるPCR検査において、キャスト、スタッフ全員の陰性が確認された時の感動と安堵は一生忘れられない。

こうした環境下で稽古を続け、迎えた開幕当日。観に来てくださるお客様の検温等のご理解とご協力もあり、目標であった九月に、無事にミュージカル『ビリー・エリオット』の幕が上がった。そして大千穂楽までの約二カ月間、誰一人として気を緩めず、その甲斐あって、誰もが舞台に立てる喜び、お客様にこの素晴らしい作品を届けられる喜びを噛み締めながら、無事に全員で全公演を完走した。この事実、演劇界に大きな希望を与えた。『ビリー・エリオット』カンパニーの出来る限りの最大限の努力、そして、お客様の

沢山のご協力と温かい応援が生み出した「奇跡」だった。

私達が何故そこまでするのか。ただ自分達が出演する舞台を上演したいというだけではない。私達の原動力は、同じ状況下で戦っている俳優仲間達からの応援、そして何より、上演を楽しみにしてくれているお客様の存在であった。この舞台を観ているほんの少しの時間でも、今の世の中のことを忘れて楽しんでほしい。この素晴らしい作品を少しでも多くの方に、安心して安全に観てほしい。少しでも元気になってほしい、何か受け取ってほしい。そして、少しずつ息を吹き返してきた演劇界に良いバトンを繋げていきたい。そんな思いを、一人一人が持っていた。俳優、スタッフ、そして観客。劇場という一つの空間に集った全ての人々が舞台を愛し、この尊い空間を守りたいという強い願いから生まれた団結力だったと思う。演劇を愛する人々の熱い思いが、再び灯を燃やし始めたのである。

『ビリー・エリオット』が誰かの希望になつていたら、活力になつていたら幸せである。時を同じくして、数々の作品が少しずつ開幕を迎えた。無事に千穂楽を迎えたという報告を目にすることも多くなった。その度にまた、胸が熱くなる。こんな時だからこそ、より一層心を豊かにするものがあったい

いと思う。私も一演劇ファンとして、観劇は日々の生活を彩る心の栄養であり、元気を貰えるものなのだ。このような想いを持つ人が一人でもいる限り、演劇は絶対に息絶えることはない。現在は、劇場で上演している作品を有料配信でリアルタイムに観劇することが出来たり、「リモート演劇」という配限定の観劇のジャンルが生まれたり、新しい演劇の形も確立されつつある。演劇に限らず「芸術」というものは、絶えることなく進化し、残り続けるものであると改めて強く実感した。これからの演劇界がさらに息を吹き返す、多くの人に愛され、必要とされ続けることを切に願っている。

プロフィール

井上花菜 Hana Inoue

東京都出身。一九九九年三月五日生まれ

青山学院大学文学部比較芸術学科在学

幼少時に映像出演デビューし、劇団四季『ライオンキング』への出演を機にミュージカルにも活動の場を広げる。

主な出演作は『ビリー・エリオット』、『サムシング・グッド』、『ハル』、『FACTORY GIRLS』私が描く物語』、『アナスタシア』等



《ながめよ君の絹の織り物》F30号72.7×91.0cm

は じめまして、多摩美術大学に通う一年生です。専攻は日本画で、岩絵の具や膠(にかわ)、和紙といった伝統的な材料を用いて日々制作しています。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い社会が一変するなかで、私たち美大生も美術に携わる者として、また大学生としてコロナ禍の変容のなかにいます。

しかしながらこのたびの『ひげ会報』は、「Thanks コロナー?」がテーマとのこと。芸術家であることの精神的な特権は、どんなものごとにも、美しさやおもしろさを見つければまなざしをもって臨めることだと思えます。本稿では、ミヅコナノの学生生活のなかで美大生である私が見つけた「おもしろさ」について、「オンライン講評会のすゝめ」と銘打ち、ご紹介させていただけたらと思います。

美 術大学での各専攻の実技授業では、課題のタイムごとに「講評会」というものが行われます。期間中に生徒が制作した作品をアトリエに並べ、それを皆で囲んで、教授による一点一点の講評に耳を傾けるのです。その際、自分の言葉で制作のコンセプトや背景を説明する時間も設けられます。作者による作品解説を含めての「講評会」なのです。新型コロナウイルスの感染拡大により、例年通り教授と生徒が集って面接授業や講評会を行うことが難しくなりました。そこで採用されたのが、自宅制作期間を設けること、そしてZoom会議ツールを用いての実技指導や「オンライン講評会」でした。

現在は、十分な感染対策の上、大学のアトリエでの講評会も行われるようになってはいるのですが、私たちが新入生の頃、講評会はオンラインでのみ行われていました。まだ名前と簡単な自己紹介でしかお互いのことを知らない状況でのこうした交流は、とても興味深いものでした。

オンライン講評会では、各々自宅で制作した作品を写真に撮り、画像データとして大学のクラスのクラウドに提出したものが、Zoom会議ツールを通して画面共有されます。既にオンライン授業や会議を経験された方はご存知かと思いますが、画像共有の際

の画面の背景は真っ黒です。個人的には、それが宇宙空間的な「無」のイメージのように感じられます。画面端の小窓に映る同級生の顔と、聴こえてくる声、作品解説のことば、そして真っ黒の空間に浮かびあがる彼/彼女の心象風景、この絵を描いた人は、新しい同級生とは、一体どういう人なのだろう? 私はずっと「ゆかしい」心持ちでした。

私 たちが普段、美術館や博物館の展覧会で絵画を鑑賞するとき、与えられ目にする情報というのは、基本的には、壁にかけられた作品とキャプションの二つです。芸術作品を作者の心象世界や心の窓、ユートピアと観るならば、これほど人の内面がありありと立ち現れるものはありません。

講評会では、さらにここに、既にご紹介した通り作者一人一人の肉声による解説が付随し、それは自身の内面や人生の朗読行為とも言えます。普段私たちが視覚のみを通して得る作品や作者についての情報を、オンライン講評会では同時に耳からも、イヤフォンをつけているならよりダイレクトに得ることができるようになります。また、作品解説のことばからも、作者の息遣いが心に吹き込んできます。多くの展覧会では音声解説が用意されますが、作者本人によるという意味でまた異なるものではないでしょうか。宇宙空間のように真っ黒つまり作者の内面の情景が立ち現れ、その風景の深奥から、朗々と、時には訥々(とつとつ)と、或いは小川のようにさらさらと、または寂しげに、十人十色の物語が聴こえてくる、これは通常のアトリエでの講評会にはない感覚です。行われる内容自体は同じなのですが、感覚的にもっと凝縮されているように感じます。人と人との間に通常よりも物理的な距離が生まれることも相まって、劇場のような演出効果を得るのかもしれない。

オンラインによるものごとは一見、非五感的に感じられます。しかしその実、オンライン講評会として私たちの目の前に展開した画面空間は、作品と作者の息遣いがありありと「聴こえてくる」少し特殊な時空間だったのです。大袈裟な解釈かもしれませんが、私のなかでこれは今までにない絵画の鑑賞体験でした。

先にも述べましたが、どんなものごとにも「よさ」を見出し、楽しむ態度を持てることこそ、芸術家の特権です。二十世紀の現代芸術家ヨーゼフ・ボイスは「すべての人は芸術家である」という言葉を遺しています。私たちはすべからく天性の芸術家であり、ひとりひとりにもものごとを楽しむための理性が与えられているのです。

この苦しい時代、そのような心の余裕を持つことは難しいと感じられる場面も多いかと思えます。皮肉なことに、芸術（創作行為）自体が、物質的そしてどこか精神的に余裕がなければできないことです。そんな時こそ既にある身近な美、ものごとの美しさ、おもしろさに触れ、心を潤していただきたいと思うのです。そうして生まれた充実の萌芽が、いま自分の周囲に溢れるさらに身近な美しさ、おもしろさにきつと目を向かせてくれます。

芸術とは「なにも絵を描いたり、楽器を奏でたり、文章をひねくったりすることではない。」かの岡本太郎も著書のなかでそう語っています。

実際の美術館、博物館、ギャラリーでの展示めぐりは腰が痛くなってしまうこともあります。オンラインでは移動の必要がないですし、混雑した会場で肩を押し合うこともありません。自分の部屋の椅子に座りながら「落ち着いて作品を目で鑑賞すること」、そして「作者の語りに集中して耳を傾けること」。これらは、恐らく実際の会場では難しいことな

のではないだろうかと思えます。

また、五感に接迫する体験は、そうでない場合と比べ記憶により深く刻まれます。オンライン講評会とは、実はある意味すごく贅沢な「オンライン展覧会」だったのです。コロナのおかげで、そんな時間と気づきを経験でき、よかったと振り返って感じます。

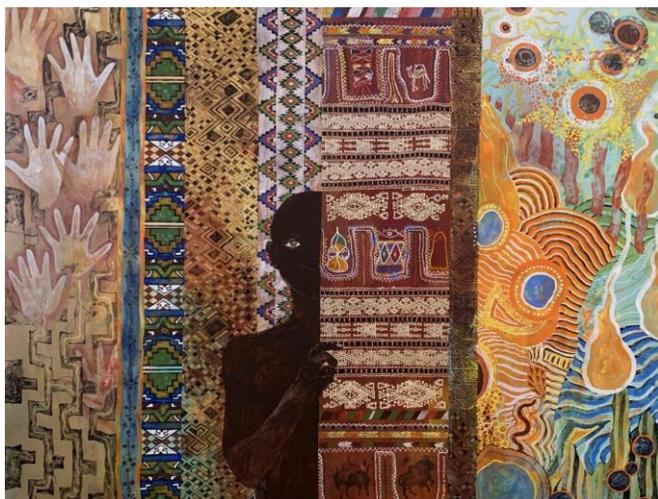
こまで「オンライン講評会」の魅力についてお話しさせていただきましたが、それでも実際に美術館や博物館、ギャラリーなどを訪れ、実物の作品を前に、自然と聴こえてくる周囲の人々の声に新たな発見を得たりするのは、言うまでもなく素晴らしいことです。その確実性と偶然性はオンラインでの鑑賞が持ち合わせない圧倒的な良さです。

また、私の専攻する日本画制作では岩絵の具という画材を用いることは先にもお話ししましたが、岩絵の具とは、その名の通り鉱物やガラスを砕いた絵の具のことです。それによって得られる複雑な絵肌（マチエール）は日本画作品の大きな魅力のひとつです。その独特の質感やきらめきは、写真や印刷では殆ど潰れてしまいますので、実物を観るといのがやはり一番正當なのです。現在、様々な美術館、博物館が展示を再開しています。ぜひ足を運んでいただき、日本画にも興味を持っていただけたらと思います。脚を動かさずとも、まずは心を動かすことで潤う気持ちもあるのではないかと思っております。

つらい状況が続くなかでも、どうか皆さまの心が少しでも潤いますように。芸術家としての素敵な出会い、発見があることを願っております。美大生ではない方には馴染みのない言葉も登場し、わかりづらい点多々あったかと思いますが、本稿が「Thanks to コロナ!？」な、おもしろさを見つめるささやかな呼び水ともなれば幸いです。

●参考文献
岡本太郎 (2015) 『自分の中に毒を持って』青春出版社、P.188より一部抜粋

●注釈 日本国語大辞典
・岩絵の具(いわえのぐ) 天然の鉱物を細粉にし精製、乾燥させた絵の具。非水溶性。群青(ぐんじょう)類と緑青(ろくしょう)類の二系統がある。東洋画に用いる。近年、人工のものもある。岩物(いわもの)
・膠(にかわ) 動物の皮、腱(けん)、骨、結合組織などを水で煮沸し、溶液を濃縮・冷却・凝固してつくった低品質のゼラチン。牛馬などの獣類からのものを獣膠(じゅうこう)、魚類からのものを魚膠(ぎょこう)という。淡黄褐色ないし暗褐色の固形物。水に浸すと吸水膨潤し、加温するとゾルに、冷却するとゲルになる。接着剤に用いられるほか、写真乳剤、製紙染色などに広く用いられる。
・キヤブシヨ 印刷物の写真やイラストレーションなどに、本文とは別につける簡潔な説明文。ネーム。
・マチエール 材質。特に美術では、さまざまな素材やその種々の使用方法によって作り出された画面の肌および、その質感のことという。



《words lapse; poetry dance》130.3×162cm

演

劇は不急ではあるが不要ではない——テレビから「不要不急」という言葉を聞く度に、心の中でそう訴えていた。演劇が途絶えたように思えたこの世界を、演劇を求め彷徨った私は、「オンライン演劇」という新たな形の演劇『青春cm』に出逢った。

元々『青春cm』として劇場公演を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い『青春cm』として配信形式の公演へとシフトチェンジすることになりました。その当時の率直な心境は？

——劇場公演ができなくなったことに関しては、そんなにダメージはなかったです。すぐ配信形式への変更を決めてもらったことで、じゃあ配信でどう伝えるかって切り替えが出来たので。むしろ「中止になるかもしれない」と思いながら進めていかなければいけない時期が一番辛かったです。演劇は芸術分野の中でも特に生活の中から生まれ、その時代に必要とされて生まれた芸術だと思うので、今このご時世に生の演劇が観られないなら、それに合わせて形態を変えていくのが演劇のそもそものつくりだと思うんです。その中で、映像技術が発達したこの時代だからこそ出来る新しい挑戦にワクワクしていました。でも、劇場公演する予定だったものをそのまま配信するのは、単純に生で観せるはずだったものをドレスタウンさせてしまうようで嫌だったんです。そうではなく、「映像だから観られるもの」にアプローチしたいと思いました。ただ映像配信する方向だったら気落ちしていたかもしれないけど、配信だからできることをやるうという動きが明確になってからが楽しかったですね。

インタビュー企画 春陽 漁介

演劇の新形態を語る

取材・文 戸村 桃音



ただ舞台を映像配信するのではなく、「オンライン演劇」というひとつの演劇ジャンルとして公演する上で、特に意識したことはどんなことでしたか？

——「お客さんは何者か」ということについてすごく悩みましたね。今までの劇場公演では、お客さんは劇場に足を運んでいる時点で簡単にその世界の一部になれるんです。神目線でもあり、その世界の同居人でもあり、もしかしたら物語の登場人物の誰か一人かもしれない。とても巻き込みやすいんです。しかしオンラインだと、画面越しにどう参加出来るかという難しさがあります。なので、お客さんの立場を僕らの中では明確にしています。それを完全に押し付けるわけではないけど、感じたいお客さんは感じられるようにすることが一番こだわったことでした。そこで、冒頭の導入のシーンでお客さんに語りかけるセリフを入れました。これが一番巻き込みやすい形だと思ったんです。お客さんにわかりやすいポジションを提示してから、次に曖昧な役割を与えて、最終的にその役割を裏切る。この手法でお客さんに没頭してもらえたらいいな、と。約八十七分(本編)の映像を、いつでも止められるという画面越しの状態で見ている観客にどう集中させるかというところに、頭を悩ませましたね。

演出していく中で、生の舞台とオンライン演劇で役者に求める演技や表現方法に違いが出る部分はありましたか？

——カメラワークとしてこの画が綺麗だから理想の立ち位置はここ！っていうピンポイントな立ち位置の指定は、

生の舞台ではない要求でしたね。でも、その日によって役者の感情も変わってくるしセリフの出し方も変わってくる、動き出したイメージも変わってくるので、あくまで理想として伝えていました。僕はその日その日のキャラクターは何を感じるかわからない、という演劇のつくり方をするので、絶対に守ってほしいという伝え方はしていませんでした、実際公演の度に少しずつ変わっていました。表現方法でいうと、二人での会話のシーンは映像芝居でいいんです。でも逆に、みんなワイワイしているシーンは演劇芝居にしてほしかった。盛り上がるシーンを日常レベルでやってしまうと演劇が持つ物語の波がなくなるので、大きくリアクションをとってほしいと思いました。この差をつくることで、生の演劇よりかなりアップダウンが作れるっていうのは面白かったと思います。あとは、演劇を劇場で観る魅力の一つに、お客さんは視点を自由に動かせるということがあると思うんです。クローズアップしたいときは集中力を上げて、引きで観たいときはその逆をする。その自由を映像では得られないことが勿体無いと思ったんです。最初はお客さんが自由に観たい映像をスイッチングできないか検討していましたが、物語に集中出来ない危険性も感じたのでやめました。でも、お客さんが自由にみられるという演劇の自由度は低め

たくなかった。アップで見続けられるシーンでも引きを入れてお客さんを自由にしたり、でもここは観たいよねっていうお客さんの欲求を出来る限り汲むようなニュアンスでアップにしてみよう。その自由度は大切にしていきましたね。

春陽さんご自身の映像に関わった経験(ロケや映画など)が生きた部分がありましたか?

——確かに作品としては関わって来たんですけど監督をやったわけではないので、映像の暗黙のルールみたいなものに触れないで生きてこれたんです。だからこそ、イメージナリーライン(向き合って立っている二人を上から見た時に二人の視線を直線で結んだラインのこと。映像内の人物の位置関係を整理するために、カメラはこのラインをまたがないということが映像制作の上での原則となっている。)を越えてはいけないという映像業界のルールも、やってみないとわからないと思えたんです。最終的に四つの角度から映すことになったので、色の配色を角度によって変えて混乱しないようにしたり、一気に真逆の映像を映すとわかりづらくなるので、一度引きの絵を挟むことで誰がどこにいるということを認識させながら進めていくということを意識しましたね。もしイメージナリーラインを越えずに客席側からのカメラだけで撮っていたら、お客さんに「ここにいたはずなのに」

と思わせてしまったと思うんです。それは絶対に思わせなくなかったんですよね。



少し脚本についてもお聞きしたいと思いますが、本作ではキラキラしているだけの青春ではなく、リアルな思春期の心の動きを描いていました。あえてその部分を描こうと思ったのは何かきっかけがあったのですか?

——はじめにキラキラだけじゃなくていいってプロデューサーに言われたときに、演劇を初めて観る人たちに、人間に触れることの楽しさが伝わればいいなと思ったんです。元からそれを知っている人も楽しめて、そういうものあまり触れてこなかった人にもドラマ性というものを楽しんでもらえるものがつくられたらいいなと思いました。キラキラした部分を魅せつつも、逆にそのキラキラが人間臭さを引き立たせてくれると思うんです。一方向からじゃない人間の魅せ方っていうのは常に意識しているもので、それが今作でやらせてもらったことは嬉しかったですね。

登場人物がそれぞれ何かに「依存」している印象を受けました。これも青春の一部なのですかね?

——大人になると妥協するタイミングを考えるようになると思うんですけど、『青春cm』

に出てくる彼らのように何か譲れないものがあるっていうのが、若さであり青さであり青春であり、でも人間として大事なことだなと思うんです。もちろん全ての青春時代を生きる人がそうであるというわけでも無いですし、そうあらなければいけないというわけでも無いんですけど。結果的には、依存をテーマにしたというよりも、青春をテーマにして人間を描いていたら、依存っていうものが自我を保つために必要というところに触れたんだすかね。



この時代だからこそ出逢えたリアルな青春時代を生きる彼らと、新しい演劇形態。演劇は需要と共に形を変え、続いていく。新しい「オンライン演劇」というジャンルに出逢えたのは、諦めずにコロナと戦いながら生きているおかげだったのかもしれない。

春陽漁介
日本大学芸術学部出身。イキウメ前川知大氏に師事し劇作を学ぶ。2012年に劇団5454を旗揚げ、第2回公演『ト音』が新人戯曲賞の最終選考に残る。外部での活動は、多数の商業演劇他、映画やアプリゲーム、WebCMの脚本など、舞台に限らない。近年の主な作品としては、Every Little Thingの20周年アルバム豪華版にて、持田香織の歌詞を物語にする「リリックストーリーブック」を執筆。今後の劇団5454の公演としては、2021年1月14日から1月24日に第15回公演『溢れる』を予定している。その他、芸能事務所の俳優養成所や、高校演劇部の講師。俳優業やラジオ構成作家、FMヨコハマのラジオDJなど多岐にわたり活動中。

青春cm² DVD化

STORY

男子高校生の“番”、“ちあき”、“エド”、“U”の4人は、毎日のように学校の片隅の、小さなくブツツに集まっている。
友人関係、恋愛、家族、将来…。
他愛もない会話から滲み出る漠然とした充実と不安。

まっすぐで不器用で繊細な彼らは、時にはぶつかり、そして時に支え合いながら、子供と大人の狭間である高校生という時間を、それぞれの想いを抱きながら過ごす。

そんな中、ブツツにこもってばかりの彼らを心配した”センセイ”は、ブツツ閉鎖を賭けたテストを実施する。
ブツツを守るべく挑んだテストで導かれる答えは、ひた隠しにしてきた自分自身だった…。

作った平面の奥にある、見えないフリの立方体一。

DVD概要

- ◆タイトル：青春cm² (ヨミ：セিশンヘイホウセンチメートル)
- ◆出演：田川隼嗣 福崎那由他 藤原大祐 細田佳央太 / 正木郁 / 猪塚健太 (声の出演)
- ◆脚本・演出：春陽漁介(劇団5454)
- ◆公式サイト：：http://bit.ly/seishun_cm2

- ◆DVD発売日：2020年12月10日 (木)
- ◆価格：5,500円 (税込)
- ◆収録内容
- DISC1：本編 (約87分)
- DISC2：特典映像 (約128分)
- (1)メイキング
- (2)千穂菜特別アフタートーク
- (3)アフターアフタートーク (9/12配信プレミアムシアター・ダイジェスト)

- ◆販売サイト：アミューズ公式オンラインショップ・アスマート
<https://www.asmart.jp/>

- ◆企画・製作：株式会社アミューズ

公演情報

第15回公演
劇団5454『溢れる』

公演日
五月二十六日(水)
～五月三十一日(日)
会場
赤坂RED/THEATER
料金
11000～5000円
チケット発売期間
四月下旬予定
お問い合わせ
info@5454.tokyo

脚本・演出
春陽漁介
出演
及川時乃
羅道聡
高野アツシ
榊木並
森島縁
小黒雄太
村尾俊明
佐瀬恭代

ひとこと

劇団5454は、日常に存在する身近な事象をテーマに作品を作っています。特に現代社会で疲れ気味である心を、脳が一生懸命守ろうとする上で起こる現象に視点を置いた作風です。

それを「サイコロジカル・フィクション (=心理的な物語)」と謳っています。今回選んだ題材は、誰もが触れたことのある「涙」です。

涙の意味は人それぞれであり、経験や記憶に基づいて溢れるものでしょう。人によっては理由もわからない生理現象のようなものであったり、人によってはストレス発散ツールでもあったり。でも、その当たり前前に流してる涙だって、心を守るために大きな役割を担っているような気がしています。

『溢れる』は、その答えを探す物語です。

劇団5454
第15回公演

作：春陽漁介

2021
5.26 WED ▶ 5.30 SUN
提携：赤坂RED/THEATER

いま、作って食べたいお菓子

made by 3年 宍戸亜紀



春

桜咲くマカロン

レモンメレンゲパイ



比喩の人がコックだったものを
紹介します！

夏

苺のカスタード
シュークリーム

チョコバナナの
NYチーズケーキ



スイーツポテトマウンテン
大好きなアップルタルト

秋



Instagram: @kiicream__
気ままに更新中。来館お待ちしております。

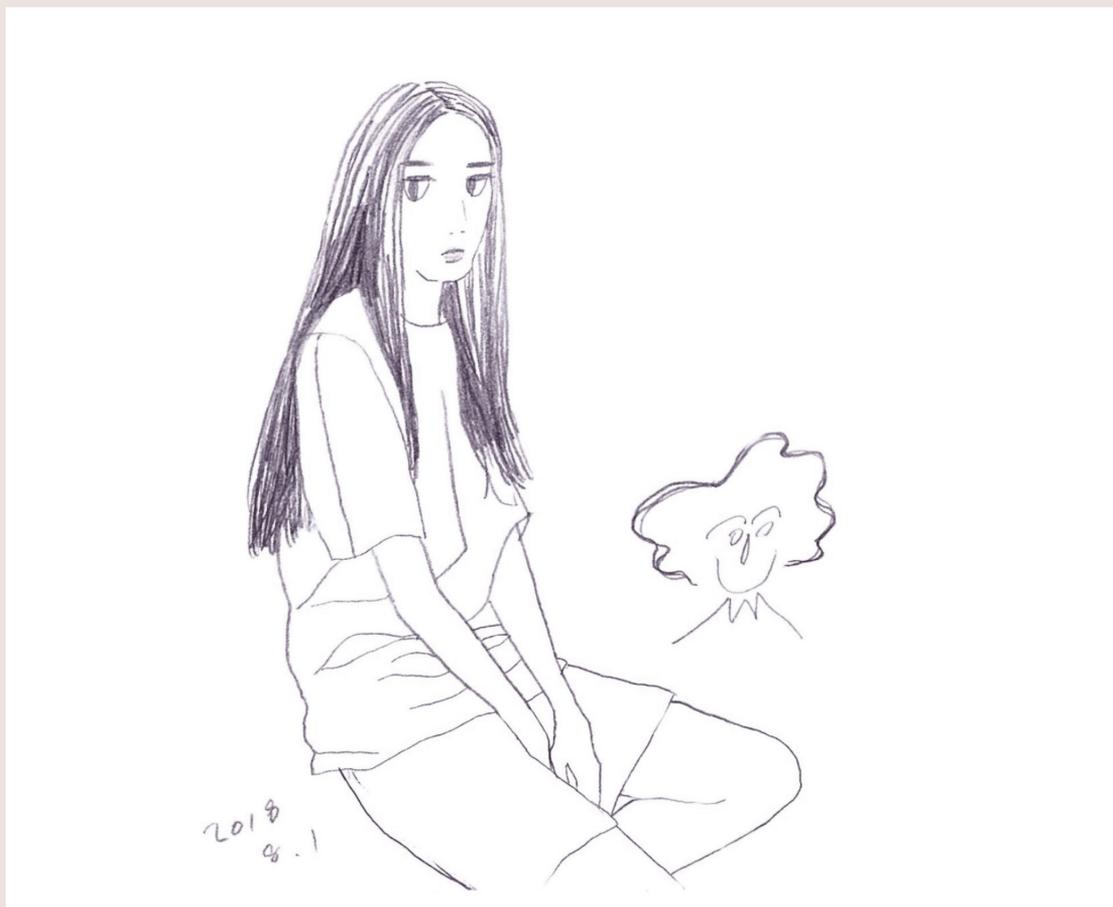


冬

抹茶×ゆず、
コーヒー×レーズンの
ダックワース

贈るガトーショコラ



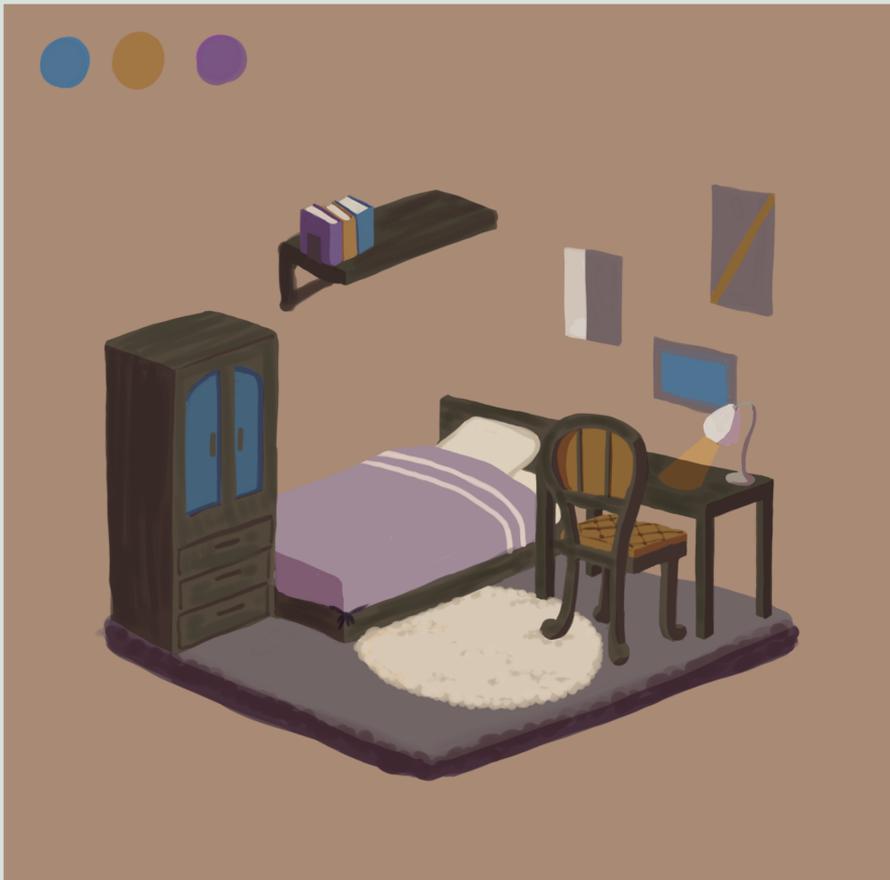


2018.08～2020.12

3年 青木蛍純









二〇二〇年十二月

3年 糸山結女





色褪せ

3年 パラトルモン



Band: 母のおさがり作り

Green @ Shishi

Mask: 母の手作り

Sweater: 北千住used

Bag: 祖母のおさがり



Collar: BOUQUET

Earrings: toncat i

Earrings: 北千住

Ring: 西萩窪used

Bag: Margiela

Boots: ZARA

Hige Collection With mask

企画・取材: 鈴木 志歩
栄戸 亜紀



Ring: 裏に3つFのT3011

Hoodie: 愛した人から

Coat: ZARA

Eat cuff: 長年の相棒

Necklace: 愛した人から



Black @ イグチ



@シホ

Ring: シェリル / 七色の糸

Sweater: F北:Rused

White



Earrings: Lattice



Bag: 母のおさげ

Boots: MODE KADRI

Dress: ManusMachina

Socks: 靴下屋



Socks: MANY MORNINGS

Shoes: Dr. Martens

@パラトルモン

Mustard

Shirt: 中野used

Jacket: 軍毛 / used



Earrings: 素今歩

Mask: EARL'S FAVOURITE

Pants: LUCKY STRIKE



@きをり

Red

Shirt: F北:Rused

Bag: mocha



まさかのオンライン授業のみで今年が暮れようとしています。昨年の今頃、誰がこの事態を想像したでしょう。人生は生きてみなければ分かりません。私のオンライン授業はzoom形式と、PDFと音声データをアップするオンデマンド形式の2通りです。どちらも在宅でできるので、当初は便利だなあと思っていましたが、8ヶ月経った最近とみに感じることは、どこかさささと流れてしまう実感の乏しさ、空疎感です。

デジタルでのやりとりは全ての情報がゼロと1に変換されて行われます。人間は数値では捉えきれない複雑系ですが、そのカオスから必要最小限の情報を効率よく取り出し行われるデジタル化は、私たちの暮らしを大いに便利にしてくれます。しかし、デジタルに不必要と切り捨てられる、ゼロと1の間に横たわる人間の膨大なムダなデータは、本当に不要なのでしょか。

オンライン授業は、電子図書で本を読む読後感、高画質な画像で作品を見たつもりになる感覚とよく似ています。今は非常時ですし、効率を追求する分野では今後もデジタル化は必須でしょう。しかし、私たち人間は、デジタルが捨象していくゼロと1の間にあるものにもっと敏感であるべきだと思うのです。

コレクションとしては、12-13世紀の英仏プラントジネット朝の人々のフィギュアがあります。パリのサン・ジェルマンの秘密のお店で入手します。



西洋美術史(中世) 武井 美砂准教授

Fine Art
Music
Performing and
visual arts

私がいつも授業をしている部屋の壁にかかっているのは、以前勤めていた芸大の大先輩、F先生の作品です。以前、展覧会に行き見たときに気に入って、買ってしまいました。画家ジョルジョ・モランディのアトリエをテーマにしたドローイング作品です。あとカメラには映っていませんが、我が家には他にも、玄関先に若手芸術家さんの作品が一点あります。そちらは以前、私がお方の個展カタログに批評文を寄せたとき、お返しにいただいたものです。作家さんと物々交換ができるのは一番嬉しいですね。あと、壁際にあつてうつつているのはサボテンのカルメナちゃんです。実は武井美砂先生からのいただきもの。家に来てから1年ほどですが、気づいたらだいぶ大きくなりました。

オンライン授業は皆さんの顔が見えず手応えがわからないので、教員としてはやりづらいことこの上ないです。その分皆さんからのコメントは毎週しっかり読み込んでいるので、ぜひ少しでも書いてください！あとプライベートでは、このところ寒くなってきたせいか寝過ぎてしまって困っています…。もともとよく寝る体質なのですが、パソコン疲れもあって拍車がかかっているような。このまま冬眠してしまうのではないかと不安を感じる今日この頃です。



西洋美術史(近現代美術)、表象文化論
池野 絢子准教授

美術史の講義はモノ(造形)の画像を見てもらわないと話になりません。講義はパワーポイントでスライドを組み上げて作っていますが、その点は対面授業の時と何ら変わりません。講義の進め方の段取りや画像の見せ方については工夫と時間をかけています。あわせて講義内容は配布資料でカバーできるようにしています。毎日、講義の準備を終えて資料をコースパワーで「お知らせ」配信を終える頃には夜が明けています。これがウィークデイの日常生活で、今年度はほぼこんな毎日です。体力勝負のひとつことに尽きます。土・日は何をやっていたのか？あまり印象に残っていません。多分、家事雑用に引っ張り出されるか、無為に過ごすことがほとんどだったでしょう。

講義は当初、二階の自室デスクからと思ったのですが、Wi-Fiの接続環境が安定しないので、一階リビングの座卓の前に陣取って行っています。卓上にはPCに予期せぬトラブルが起こったとき、

すぐ対処できるよう、もう一台のPCが常時並んで立ち上がっています。視界の端では隣の棚の隅において垂直に立てた片笱の先端一点において絶妙なバランスで留まっている竹製のとんぼ(ベトナム産?)がいつもエアコンの微風に揺れています。



日本彫刻史、密教図像学
津田 徹英教授

HIGH
KAI
OU

日本美術史
出光 佐千子准教授

実は、幼稚園からシッターさんと帰ってきた息子が部屋に入ってきたり、部屋に鍵をかけて、冷や冷やしながら授業を行っています。そのために、大好きなおやつや、夢中になりそうな塗り絵などを食卓の上に置いておきます。最近では、卒業生が送ってくれた『めばえ』の付録の工作にはまって、オンライン中に厚紙で公衆電話を作っていたように、幼稚園の先生から真顔で「ご自宅に公衆電話があるって息子さんが話してくれるのですが、どんなお家(豪邸)に住まわれているのですか？」と(爆笑)。マンションでも最近は公衆電話がないところが多いですから、相当、不思議だったみたいです。

お気に入りといいますが、書斎が狭くて画面の後ろに映ってしまうのが、父に買って貰った軽井沢彫りの筆笱で、これは一番上の蓋を開けると机になります。学生時代に勉強用を買ってくれたのですが、桜の柄が素敵なので、化粧台として使っています。

その上には、ゼミ生から卒業式の時にいただいた桜爛漫のカード。桜の花一つ一つに一人ひとりメッセージを書いてくれていて、授業で疲れた時に読んで元気をいただいています。その横には、ハワイ旅行の家族写真。ハワイの海を見て、開放的な気分になるのも大事なと(笑)。現実逃避できるものを置いた方が、仕事がかどるタイプみたいです。



映画研究、表象文化論
三浦 哲哉准教授

映画の授業がオンライン授業になって困るのは、やはりスクリーンで作品を上映できないことです。たとえ抜粋であっても、スクリーンに映像が大きく克明に写し出されれば、ただたんに情報を知るといふ以上の、「体験」になりうと思います。すくなくとも、そのように期待してこれまで映像を上映していました。オンライン授業では、例のカクカク問題もつきまといまいます。「体験」になるとまではなかなか期待できません。そこでした工夫は、著作権の許す範囲で、とにかく多数の映像作品に触れることのできる環境を整えることでした。質より量、というわけですが、そう考えると、逆にオンラインにはアドヴァンテージがあります。膨大な量の「配信動画」にアクセスすることがいまや可能になっているからです。

授業も含めて自宅での仕事ばかりになってしまったこの状況でのお気に入りアイテムは、ふくらはぎマッサージ機です。奮発してパナソニックのいいやつを購入しました。これが最高に気持ちよくて。圧が足りなかったらどうしよう……

と買うまえは少し心配でしたが、いざ試してみたら、イタッってなるぐらいしっかり揉み込んでくれるのはうれしい驚きでした。もう絶対に手放せません。



西洋音楽史
広瀬 大介教授

もともと引きこもり気質です。コロナ以前も自宅・学校・演奏会しか行く場所がないので、この異常事態ではあっても、毎日家にいること自体は、まったく苦になりませんでした。もちろん、学校で学生の皆さんに会えない、そして演奏会がなくなってしまったのはとても喪失感ではありましたが、オンライン授業のための機材を整え、日々試行錯誤するのは、ガジェット好きとしてはむしろ楽しかった、というべきか(苦笑)。

自分の場合、ピアノを弾く、音楽を聴かせる&ビデオを見せる、PDFで楽譜に直接書き込みを入れる、という、おそらくはかなり特殊な授業形態をとっていることもあり、それぞれを連携させることはなかなかハードルの高い課題ではありましたが、まあなんとかクリアできているかな、と思います。もともと双方向が想定されているゼミは皆さんの様子がわかってよいのですが、講義スタイルの授業では完全に相手の見えないラジオDJ状態。まあ、慣れましたが、やはり寂しいものです。授業中、自分の顔だけ見てもらうのは申し訳ないので、私の話に飽きたときは後ろに泳いでいるマンモス金魚(名前は日によって変わる。いまは金太郎)を眺めてもらうよう、お願いしています。



専攻は中世ルネサンスの音楽史であるが、IT技能は旧石器時代である。春休みにWebexだかWeetabixだかがどうのというメールが大学から来てアタマが真っ白になった。ステイ・ホームだからITに長けた同僚の広瀬先生にも頼れない。折しも老父の在宅介護中で、介護とIT双方で未体験の嵐に揉まれた。授業開始後も、PCが不調で講義が開けるか毎回綱渡り。講義していると突然「△×○※≦%」とわけのわからぬメッセージが出る。「わぁヒロセさぁ〜ん」と叫んでも孤島の俊寛である。やがてスキャン1枚に4分かかったプリンタが絶命し、レポートを読もうとしたら「ワードが開けません」といわれ、ようやく成績つけてポータルで送ろうとしたらルーターが死んだ。旧石器時代人がPCマルチ崩壊に襲われた恐怖を想像してほしい。

オンラインの長所といえば、私語やスマホや居眠りという不愉快な音や光景に苛まれずにすむことで、これはすこぶる精神衛生上良い。講義後は目の前のカウチが待っている。背中に馴染んでS字にへこんだクッションが心地よい。いま時は電気シートも敷いてあるから岩盤浴のように背に染みてる暖かさを感じながら睡魔に身を任せる。至福である。



音楽学(西洋音楽史) 那須 輝彦教授

西洋演劇、イギリス文化
佐久間 康夫教授

オンライン授業が始まって数か月がたったこの時期に、あらためて思っていたのは、やはり生の授業のありがたさです。担当する演劇の授業では、プロの劇団の配信映像など、紹介に努めました。しかし、さあ、自分でそれを熱心に観ているか、と問われると、画面を見続ける集中力が保てないというのが正直なところ。

舞台の魅力が、劇場で目の前で起きていることを一緒に体験することにある、と今さらながらに感じた一年でした。ライブであるという意味では、授業も演劇と同じカテゴリーだと感じています。学生が集まって教室にいるという臨場感が大切なのです。まれに良い授業ができた時に味わえる高揚感も、そこから生まれてくるのだと思います。

この数か月間、趣味のドライブに出かけることも、写真を撮りに旅することも極端に少なくなりました。逆に家にいることが多いせいで、オーディオ熱が再燃しました。私はいまだにアナログ・レコードを愛聴していますが、しばらく聞いていなかったためにすっかりカビが生えてしまったレコードを、クリーニングしては聴き直し、こんなにいい音が溝に刻まれていたのか、と惚れ直すことしばしばです。



お写真および寄稿いただいた先生方、ご協力ありがとうございました!

日本芸能史 佐藤 かつら教授

オンライン授業で良かったこととしては、授業構成や内容を見直したり、録音や録画などの記録を取れたりしたことがあります。またこれは自己満足かもしれませんが、綿密に受講生の質問に答えるようにしたこと、例年よりも個別のコミュニケーションは取れたように思います。

オンライン授業で困ったこととしては、ごく普通の感想ですが、受講生と空間を共有できないことがあります。私は家庭内の事と仕事とが雑然と詰まったような私室で授業をしているので、リアルタイム授業をする際に私的な空気を取り払うことがうまくできず、非常に努力が要ります。切り替えのポイントとしては(一応)身を纏うことで、それで何とか授業をする心構えを作りますが、難しいです。それと、リアルタイム授業では、画面に映る自分の顔を見続けながら一人でしゃべり続けるという特異な体験が続いてきたわけで、これが今後の自分にどう影響するのか、怖い気持ちです。いつも傍らに何となくおいてある手乗りサイズのペンギンのぬいぐるみをパソコンの側において、それに話しかけるように授業をしてみたこともありますが、全然うまくいきませんでした。自分は何をしているのだろうという絶望感に襲われました。ペンギンではなく、みなさんの顔を見ながら授業ができることをひたすら願いつつ、一年が終わろうとしています。



* 比較芸術学会会報とは？ *

この会報は、学科内の有志メンバーが発行しているフリーペーパーのようなものです。

芸術を愛する本学科生が、普段から関心のあるもの、興奮するもの……

みんなに知ってほしいもの、芸術にまつわるものならば何でも載せます。

読者の皆様だって、好きなバンドのライブに行けばその感想を誰かと共有したくなることがあるでしょう？

まさにそれです。そのエネルギーが、この会報には文章の形でぎゅっと詰まっているのです。

大学生目線での芸術や評論が、読者の皆様にとって新たな世界への扉となれば幸いです。

* 非常によくある「比較芸術学科って何を学ぶの？」という問いについて *

比較芸術学科の勉強は作品の鑑賞にはじまってレポートにおわる。

鑑賞して、自分の心の移ろいを感じ取ることが初めの一步。

心が揺れたそのポイントを掴み、そこを軸に広く深くえぐり込む。

理解を深めようとする、自ずと他の時代・地域・芸術分野の表現やテーマなど、

あらゆるものと比較してしまっています。

だって、比べないとその作品の位置づけなんかも分かりませんから。

そんな意味での比較芸術学科です。感じ、考え、レポートにまとめ上げる。

ただただ作品を鑑賞して遊んでいるってわけではないんですよ。

つまるところ、「芸術を通していろんなことを考える」。これが私たちの学びかもしれません。

素晴らしい芸術を切り口に、文学にも歴史にも政治にも経済にも、

あるいはちょっとした科学技術なんかに掘り進むことができる比較芸術学科。

ちょっと「いいなあ」って思いませんか？

個性豊かで愛情深い教授陣と、自分の心に忠実で熱い学生が、比較芸術学科には集まっています。

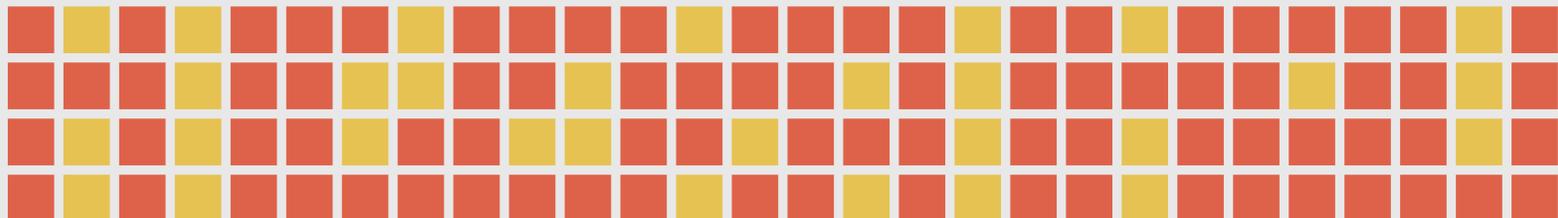
どうぞよろしく願いいたします。

青山学院大学文学部比較芸術学会

ひげ会報

って、何？





編集後記

はじめまして。

私は今号の編集長を務めさせていただきました。

まず編集委員の皆様、ライターの皆様、各先生方、そして

この一冊に興味を持って手に取ってくださった読者の皆様に感謝申し上げます。

今年度は新型コロナウイルスが流行し編集委員会の始動も遅れ、年に2冊ほど刊行しているひげ会報も1冊のみとなってしまいました。

しかしながら「Thanks to コロナ!？」というテーマのごとく、私たちは逆にこの1冊に全力で打ち込むことができました。各委員が持つこの熱意が読者様にしっかり伝わっていただければ幸いです。オンライン会議や文面でのやり取りなど何もかもが新しくなった状況に戸惑うも、各々が初めての体験でありそれは相互に理解できるものでもありました。そのため中盤からは会議内で意見がよく飛び交うようになり、

最後には練りに練れたひげ会報が出来上がったと思っております。

そして、この会報誌の面白いところは比較芸術学科の学生の個性がぶつかり合って融合しているところです。

本学科生はそれぞれが違う方向に良い意味で個性が強く多様性を生み、

それらを掛け合わせることで何倍ではなく何乗にも膨れ上がります。

学生の想像力は無限大です。

ひげ会報がこれからも個性を表現できる場として存続してほしいと願っております。

編集長 3年 渡邊美月

この一年足らずで様々なことが変化しました。それはきっと、良い面でも悪い面でも。

そこには変化のための犠牲も少なくなかったことでしょう。

しかし、その犠牲に打ちのめされて今を不幸な時代として生きたくない。

いつか振り返って「大変な時代だった」と笑えればいいなんて言うけれど

私は今このときも、精一杯楽しむ努力をしたい。

同じように今に希望を求めている人々にとって、今号が有意義なもの1つになればという一心で力を注ぎました。

そして「ひげ会報vol.14」が完成したということは、

それほどまでにこの状況下でも動き出している芸術分野があったということです。

それも一冊の会報誌を完成させてしまうまでに。

芸術やエンタメの多様性とその可能性、感じていただけたでしょうか？

少しでもそれを感じ、心が前向きになってくださったのなら、この上ない幸せです。

最後に、今回関わってくださった全ての人に心からの感謝を。

副編集長 3年 戸村桃音

執筆陣：1年生 西山侑華 2年生 久保翔誠 丸岡雅弘 3年生 犬飼ゆうり 戸村桃音 生田目幸穂 町田大悟
榎将吾 堀内秀平 4年生 岸本彩菜 山下実紗 井上花菜

編集長：渡邊美月

副編集長：戸村桃音

デザイン班：番あかね 井口周子 宍戸亜紀 時田菜々子 中莖えりか

文章校正：時田菜々子 又木彩花

編集委員：関奈津美 濱田莉々 宮本礼 吉原智美 吉松浩子

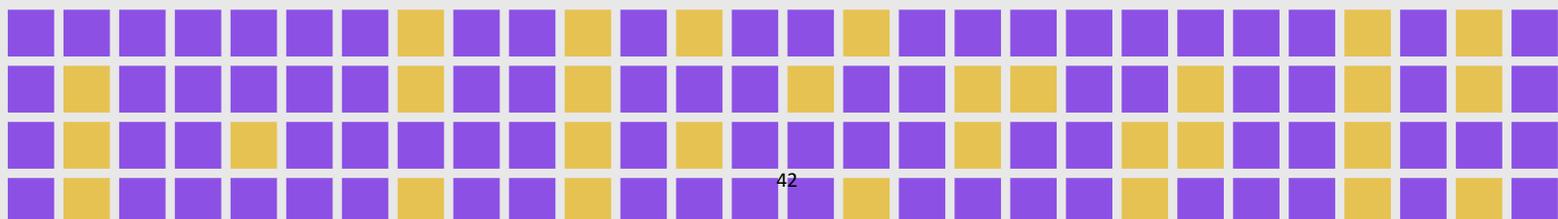
ひげぎゃらりい：宍戸亜紀 青木蛭純 糸山結女 パラトルモン

ファッションスナップ：鈴木志歩 宍戸亜紀

取材協力：春陽漁介さん 黄地香の子さん

会報責任者：文学部 比較芸術学科 准教授 三浦哲哉

お問い合わせは比較芸術学科研究室（03-3409-9764）まで



ヒゲノアスク

ひげ会報

Vol.14

比較芸術学会会報 2021年春号 2月発行 発行/青山学院大学比較芸術学会
編集/青山学院大学比較芸術学会員 編集人/渡邊美月 戸村麻音

隠
し
な
い

魅
せ
ま
せ
う



Sligeha



0120-2111697
4899-725
無断での転載・複製を固く禁じます。

web版